
なんでも屋さんが三国めぐり

はいんちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも屋さんが三国めぐり

【Nコード】

N0311Y

【作者名】

はいんちゃん

【あらすじ】

なんでも屋さんと言う何とも安直なネーミングで便利屋を営んでいたハンター・アルIIプライドはある日、いつものように依頼をこなし、いつものように酒飲んで寝てたら目覚めると知らない土地。現状を把握しきらないうちにあれよあれよと天の御使いなどと呼ばれて……

依頼なら請け負ってやるけど、天の御使いなんて名前は請け負いたくなかった。

ハンターハンターのオリ主が、恋姫の世界でだらだらとなんでもする話(?)の予定です。更新遅いです。今後の展開は全く考えてないです

act 1. 夢落ちだったらどんなによかったか（前書き）

間違って短編で登録してたので後でそっちは削除します
って思ったらあんまり削除しないでって書かれてた。放置でいいの
？

act 1. 夢落ちだったらどんなによかったか

瞬間、俺は目を覚ました。

何の瞬間だ、とは思いかもしれないが、目が覚める時なんてのはいつだって唐突だ。

大好きなあの子とキスする瞬間。大嫌いなあの野郎をぶんなぐる瞬間。

今日のドリームはリリーさんの飼い猫が巨大化して俺の四肢をその爪で引き裂くという凄惨たるものだった。

はつきり言って悪夢以外の何物でもないが、あの程度の危機は今まで何度もあったしあれは諦めざるを得ないと感じていたのだが……。

「あーゆめでよかった」

儲け物だ、死んだと思っていたのに生きていたのだから。

所詮は拾った命、好きに使おう。今までもそうやって生きてきたんだけどね。

いま、夢は所詮夢だろって馬鹿にした奴、正直に手を上げなさい。その通りだ。安心したまえ。ただな、世の中には『眠りの森の美女』^{ナイトメア}とか言う念能力を使うクソ野郎もいたりしてな、文字通り悪夢を見させるってもんだが実際にその夢で見たダメージは肉体に還るっつーおっそろしーもんだわ。

まあその分制約も厳しそうで『ただし自分もその夢に登場しなければならぬし、そこでのダメージも自身に還る』ってもんだったか。

ちよっと前の依頼でちよーっと関わっただけだしはつきり言って

赤の他人だが、恐らく手の内は完全に晒してないんだろうなーとは勝手に思ってる。

それはさておき妙に腰が痛いと思ったらなんつーか、そこは見知らぬ荒野だった。

腰が痛えてそりゃまあ地面に寝転がってたら腰も痛くなるわ。

確かリリーさん家の飼い猫を見つけた後、たまたま懸賞金付きのこそ泥を見つけたからそれを潰して（リリーさんからの報酬の方が高かったけど）、酒買って気分よく一人酒に興じて……記憶はここで途絶えている。

「ん？結構飲んでたしそっから寝落ちしたっぽいが……」

いくら酔ってたとはいえこんな辺り一面碌に人間もいなさそうな場所まで知らない間に移動してるなんてあり得るのか？

いや、ありえてるからこうしてるわけだが……。

「夢遊病患者も真っ青な移動っぷりだなマジで」

確かにここ最近は殺しの依頼も無かったし、気を抜いていたのは事実であるが流石に誰かしら侵入してくる気配はわかる。

何でも屋を名乗る以上何でも出来ないといけないのさ。

そんな俺がこの体たらく。本当に何なんだ。ていうか仮に襲撃だとしたら誰だ？何故殺さない？何かの念能力か？

とか何とか目の前の現実を受け入れるとともに持ち物確認。

愛用のパジャマ。一人酒するとそのまま寝るのが通例（俺の中で）

なのでピンクの豚さんマークのパジャマ。

少し前に「趣味悪い」とか言われたりもしたけど、俺はそんな心なき言葉には屈しない。

良いじゃないか、結構じゃないか豚さん印のパジャマだって。

っと話が逸れたな、持ち物持ち物……。

……ま、パジャマですし、寝巻ですしそんなもんですし……。

相棒のベンズナイフとワルサーPPKだけは装備されてるようだ。ルパン三世が好きだからという理由。そしてナイフといえばベンズナイフ。

ヨークシンで拾った最高の拾い物だ。中期型で毒も仕込みやすく最高の相棒だ。

あれがたったの1万Jで買えるなんてテンション群上りだったよ、あの時は。

そのせいで旅団のリーダーやら奇術師の変態やらに少し目をつけられる結果になったが、それを差し引いても……差し引いても……プラス、だと……思……。ヤバイテンションダダ下がり。帰って二度寝したい。つかこどここの……？

「……!……!」

い、いかんいかん。また思考が逸れてたわ。

なんか周りも騒がしいし……。

「おい!聞いてんのか!?!」

誰?そこにはいつの時代の人間だよ、と言いたくなるような服装

の男3人。

ノッポとデブとチビ。3人足せばただのデブになりそうだ。あとはガリを混ぜた4人組にしたら完璧だろうな。

どうでもいいけど、槍で武装してるし敵っぽいな……殺しは依頼以外ではする気にならないんだが。死なない程度には、だけど。

黄色い布を頭に巻いた3人組は殺気立たせながら槍を突き付けている。

要は物盗りってことか。どこも変わんないねー。つか、ベンちゃん（ベンズナイフの呼称）は腰にしまってるけど、ワルちゃん（ワルサー以下略）は手にしてるってのに、その距離から槍突きつけて勝った気になってるってどこの蛮族？ねーどこ蛮よ？

なににせよ、対話から入らねばなるまい。対話というコミュニケーションは人間の生み出した至宝ともいえる。

それっぽいこと言えば頭いいように見えそうだからそれっぽいこと言ってみただけど、どや？（ドヤ顔）

「聞いてねえよ、何だって？」

「ああ！？この槍が見えねえのか！？こんな状況で人の話聞いてないってどゆこと！？」

ノッポが捲くし立てているが、仕方ないだろう。誰にだってミスはあるさ。

ビビる要素もねーし、何より念もしらねー素人さんだ。

っても念は飽くまで対個人戦専用のブースターみたいなもんで科学の力や数の暴力には勝てない。

……例外はあるけど、ともかくこいつらが例外にあたる存在でな

いということは確定的に明らかだ。

体の運び、槍の握り、そして何より全身から漂う念とは違うオーラって言うか……いわゆる『カリスマ』みたいなもんを感じない。そんなわけで冷や汗一つかかずに、表情一つ変えずに言い放ってやった。

「いや、考え事してりゃ人の話聞いてないことだってあるさ。ドンマイ」

あんまりだらけた態度をしていたからか、3人は勝手に頭へ血を上らせている。ははっ、茹でダコみたい。

「こ、こいつ馬鹿にしてるんだなあ」

「兄貴イ、さっさとヤッチまいしょうよ!!」

「それもそうだな……さっきから突っ込みたかったけどお、大体なんだその豚の服は!?!」

一番偉そうなノッポが声を荒げる。その内容は……捨て置けない内容だった。これをスルーするなど俺には出来ん。

「カッチーン、なんつつた? ねえなんて言った? 貴様は今、ふれちゃならねえ傷いたみに触れたぞ」

心なき言葉には屈しないけど、心は痛むんだよ。

なんで見知らぬ他人にまで寝巻に関して突っ込みを入れられなければならんのだ。

ふざけるんじゃない、敢えてもう一度言う、ふざけるんじゃない

!!

殺気と同時に纏から練の状態に移行。全力には程遠いが、素人さんをビビらすにはちょうどよかるー。

「なあ、知ってるか？人には触れちゃならねえ傷^{いたみ}つてもんがあつてよおー……」

悪魔のように口角を上げる。効果音にして「ニタァ」という粘っこい笑いだろうか。

その笑みも相まって殺気が1割増しだと勝手に思っている。

どうやら3人組はそれに圧されたく少しづつ後ずさりしていた。

それでもかまえた槍を解かない、というのは褒めてやるべきかはたまた槍を下せば最期、命は無いと思っているのか。

追っ払うには丁度いい具合だな。心の中でもニヤリと笑う。

「そこに触れたらあととはもう……」

「命のやり取りしか……」

「あいや待たれよ!!」「残っ……!!」

えっ。何あの槍女。

あいや待たれよじゃないよ、あいやーてなんやねんおま。待つのはお前だ。

俺がもっと語彙に富んでいたのなら、千の罵倒を以って槍女をMに目覚めさせる程罵倒していたはずだ。

「武器も持たぬ御仁に対し3人で囲い、槍を持って襲いかかるとはやはり貴様ら黄巾党の悪事、見逃せぬ!!」

いや、持ってるし。銃をしらねーってどんだけ田舎だよ、ここ。だとすると困ったな、ワルちゃんを調整する道具はあるのか？銃弾も限りがある……っていうか今装填されてる分しかない……。はてさて、だとするとワルちゃんの出番は少なそうだな。

「はあ……何か萎えた。ねー俺帰りたいんだけどここどこよ？」

「「!？」」

なんでそんな驚くんだよ……？

こんな僻地に住んでるとでも思われたのか？ いやいやありえんだろ人が住む環境じゃねーよ、むしろこんな場に5人も人がいること自体奇跡だ。

そんなわけで素直にその疑問を口にする。

「つーかなんなのお前ら？こんなところにノコノコと」

「そ、それは『天の御使い』とか言うのがこの辺に落ちてくるって噂になってたからなんだな」

天の御使い？なんだそりや意味がわからん。専門用語使って楽しいのは専門家だけだったかーちゃんに教わらなかったのか？

けどさも当然のように口にしてるあたり、俺の方が常識知らずってことになんのかね。ホントどこココ？

「『天の御使い』ともすれば変わったモン持ってると思ったんだが

……」

おいおいノッポさんよ、そんな不確定な情報で動いたのかよ。旅団の連中はもつと狡猾に効率よく盗んで行ってたぜ？中にはド派手なやつもいたが。いや、大半がド派手な奴だったけど仕事っぷりはすごかったな！。

物盗りのはしくれならもつとスマートにだな……おつといけねえまた考えが脇道に。

ついでに隙も出来てるし3人組みの武装は解いておくか。いつまでも槍突きつけられんのも気分悪いし。

「よいしょー」

我ながら何とも気の抜けた掛け声ではあるがその威力は絶大。

ベンちゃんに周で念を纏わせての一撃だ。穂先と棒をOSARA
BAさせるなんぞ朝飯前だ。

朝飯にありつけるかあやしいけどな、ガハハ。

なんて一人ほくそ笑んでいたら周りが静まり返っていた。

「何？どーしたんお前ら、さっきの威勢はどーしたん？ほら、貴様らの悪事見逃せぬー！！って奴」

「……なんだか棘のある物言いですな」

「うん、他意しか無いと自負してる」

槍女は俺の邪魔をしたのだから、それくらい許されるべきだ。そして残る3人組。顔は既に真っ青なのだが、さてさて。

「んじゃ、話の分かりそうなこっちの女に詳しいこと聞くからお前は帰れ。」

そこの槍の穂先みたいに頭とお別れしたいのなら残れ」

そんな俺の言葉に乗せた威圧感に今度こそ恐れをなしたのだろうか。

3人組は一目散に駆けていった。さて、後はここはどこなのか聞くだけなのだが……。

「見事なものですね」

女はじろじろと俺の頭から足の先まで眺めている。まるで値踏みするように。

貴様も俺の傷にいたみ触れると言うのか。よろしい、ならば戦争だ。

「ところで、あなたが『天の御使い』殿でよろしいのですか？」

「なんだよ、その天の御使いって？確かに頼まれた事を請け負う御使いみてーな事はしてっけど、頭に天がつくほど立派な事はしてねーぞ」

「ほほー。それは興味深いですな、たとえばどのような？」

「飼い猫探しから浮気調査、果ては人殺しでも地獄の沙汰は金次第ってね。」

ネーミングセンスねーから名前はそのまま『なんでも屋さん』でこの界限に腰を落着けさせてもらってる。

名刺は手元にねーけどアルップライドだ、今後ともよろしく。

まー、口上の邪魔はされたが一応助けようとしてくれたっつー恩

もある。依頼さえしてくれりゃ2割引きで請け負ってやるぜ？」

アルは本名だがはプライド部分は偽名だ。

特に深い意味は無い。何かカッコイイから職業上見た目とかそういうのにも気遣わないと仕事こないから。

その理由でハンターライセンスも取ったしさ。

「……それはなんとまあ、やはり天の国でも殺したり殺されたりなどというものがある、と言う事ですか。環境が変わっても、人は変わらないという事ですな……」

え？何勝手にしみじみしてんの？ていうか天の国って何だよ？

俺が腰落ち着けてたのヨークシンなんですけど？人の出入りが激しいからな、結構依頼も舞い込んでくるんだ。

まあ、『なんでも屋さん』って名前が悪いのか胡散臭がられてっけど。

だったら名前変えろって話なんだがこれがまた占いだとかかなりいい運勢なんだよな、この名前だと。

事実こじんまりとはしてるけど立派な事務所も構えられたし経営自体も悪くない。

後は可愛い助手が居れば完璧なんだけど、あんたどう思う？」

いつの間にか声に出してた。どこから語り始めてたかは自分でもわからんが、熱意が伝われば良いと思うんだ。

人って心と心を通わせる生き物だと思うんだ。

「つまり、それはこの北方常山の趙子龍を助手にと申されまするか？」

チョー||シリューってんのか、この槍女は。あんまり聞かない名前だな。やっぱこここの田舎やねん。

「えっ、まあ可愛いけどそうなの？」

「……あなたがご自分で仰ったではありませんか」

なんでそんなあきれた顔してるの？パジャマ？パジャマが悪いんか？パジャマは悪くない！！パジャマを悪く見る世間が悪い！俺は犠牲になったのだ……世間の目の犠牲になったのだ……。

「いや、自分で自分を可愛いって言うてるあんたほどじゃ……いや、可愛いけど」

自分で自分を可愛いって理解してる女ほど手に負えないものは無いよな。

いや、自分を可愛いって思っていないような稀有な女はそうそういるまいて。

「ふふ、天の御使い殿にそのような言葉を頂けるのならありがたく頂戴しましょう」

チョーの微笑みは無駄に可愛くて少しドキッとしたけどそれ以上にここはどこ？

「ちゅーか話逸れまくってるんですけど、ここどこなんですかね？イヤマジで」

「ふむ、話が逸れたのはあなたのせいだと私は思うのですが……」

責任の所在を求めることでまた話が逸れそうなのでこの話題は終わらせましょう」

む、その言い方だと俺が悪い感じじゃん。
しかもここで言い返したら話題が逸れるってんでやっぱり俺のせいだし。

……この女、出来るな。ここはひとまず人類の至宝・コミュニケーションをだな……。

「さて、ここはd「だいじょうぶですか？」」

ま、また邪魔が入った!!

許せん、今度ばかりは仏のアルさんと呼ばれた俺でも全力で右ストリートするレベルだ。

目に炎を滾らせながら声の聞こえる方へと振り返ると。

「この辺は人通りも少ないというのに、運が無いですね」

ちっこいのと。

「とはいえその様子だと追い払えたようですね」

メガネ。

雰囲気チョーの奴の仲間っぽいが。

「おお、風、稟。こちらの方は天の国で「なんでも屋さん」なる便利屋を営まれておられる、ある……ええっと……」

「アル!! プライドな」

「そうそう、あるぷらいど殿だった。天の国だけあって名前もこちらのものとは違うものとなっているようだ」

「そうなんですかー。風は程立と言いますよ」

「私は戯志才と申します」

いや、名前よりもここはどこ? うちはどこだ?

全く、これだから人の話を聞かない奴ったらー!

話を聞かない女共ってタイトルで自叙伝でも出すかこのやろー。
程立とか言うガキンチョは一人称がおかしいがまあそういう風習なのかもしれない。

ここが俺の知らない田舎っぺ大将なのは確定的に明らかだし、ヨークシンは世界的に有名な土地だしそこを天の国と崇める田舎もあっておかしくないし、やっぱ移動系の能力者の仕業なのかと問われると疑問を呈さざるを得ない。

――なんで、そげなことするとね?

思わず博多弁になるほどに目的が見えない。

現状を無理やりこじつけるなら出来ないこともないが、目的だけがさっぱりだ。

「はいはい、チョーさんにテーさんにギーさんねはいはい了解了解それで、ここはどこ?」

「こんなに可憐な女子3人に囲まれてその態度は如何なものだろう

か？」

「ここは幽州？郡ですよー」

「ギーさん……」

三者三様のリアクションを取るがいちいち相手にしてられないので一番価値のある情報だけ拾い上げることにした。

幽州？郡……なるほど、わからん。

「幽州？郡……そうだな、ひとまず近くの村に行くとするかなー。なんつーか、寝巻で行動するのはあれだし」

分からんけどとにかく情報だ。一人でも多くの人間に会い、この場がどんな場所なのか知っておかねば。

別にヨークシンじゃなくてもなんでも屋は開けるし別にどーだっていいんだけどな。

すると3人はすごい意外そうな顔をしてこちらを見ている。なんだ？ついてくんのか？

「いえ、その服装寝巻なんですって思いましてー」

程立が3人の思いをそのまま言葉にするようにわざとらしく驚いて見せた。

「可愛いだろ？」

「そ、そうですねー……」

なんやねん、なんぞ文句でもあるんか？お？

つーか逆にヨークシンについて何知ってつか聞いてみたら何かわかるんじゃない？

「それはさておき、お前らヨークシンって知ってつか？」

「「「よー……苦心？」」」

「あ、知らないなら知らないでいいんです」

ふむ。天の国がどうたら言ってるけどヨークシンは知らない。
認識の齟齬からくるものなのかはたまた……。続けて問うことにする。

「そんじゃ、天の国って何だ？ていうか天の御使いだとかいうわけのわからん称号は誰が決めたもんだ？」

「天の国とは、あなたが今まで過ごしておられた国のことでは？
後、天の御使い殿に関しては管輅の占いで数カ月程前から囁かれております」

「なーる。そんじゃ俺を天の御使いだと思ったのは見知らぬ服を着た奴が占い通りにこんな場所に居るからっていう状況証拠から判断したわけだ」

チョーの言葉を反芻しながらも同時に天の御使いと俺の係性を明らかにする。

はつきりいってそんな称号もらっても迷惑なだけだ。聞いた感じなんか偉そうな予感がするし。

占いなんぞ信じるのもあれだがノストラッドファミリーの占いかもあるし、名の売れた占い師が出したってんなら周りの人間が信じちまうのも無理ないわな。

だが、それ故に天の御使いと言うネームバリューをわけもわからず受け取るのはマズイ。

いつだって権力には責任が付きまとうもんだしな、どこのだれかもわからん奴から責務を押しつけられちゃかなわん。

その権力を狙う奴に狙われるって可能性もあるし、ここははっきり否定する方が良いだろう。

「その通りですが、違うのですか？」

ギーさんがキョトン顔でたずねてくる。メガネ美人がキョトンとするとすこぶる可愛いんだけどどうしたらいいのだろうか。

ひょっとしたら天の御使いとやらなのかもしれないが、はっきり言って人様に誇れるような仕事をした覚えは無い。よって否定する。というかそんな称号要らない。

「俺はそんな風に呼ばれた覚えはねーぞ？天の御使いの一人や二人、その辺に転がってるでしょ」

「むー、確かに天の御使い様は二人居るとのことでしたが……」

テイさんの言葉に驚きを隠せない俺。何その情報の後だしジャンケン。後俺が御使いなの確定なの？やめてよね。

「それじゃあれだ、あんたらが御使い様とやらに何の用かしらんけど、そっちの方を探すとヨロシ。

俺は適当にそこいらの村にでも行ってくるから」

「「ええー！？」」

だからなんで驚くの？仮に俺が御使い様だとしてどうして3人に

ついていくと思ったの？

俺はあの雲のように自由に生きるのさ。

そんな中でチョーだけが思案顔。
のちに悪そうな顔。

やべ、何かたくらんでる。

「それじゃ俺はここいらでお暇をb「あいや待たれい！」」

また来たよ。誰が待つか！

俺は、駆けた。

「させるか！」

しかし まわりこまれてしまった！

「な、なんてすばやさだ！」

その時、俺は見た。チョーのドヤ顔を。

「アル殿。こんな辺境の地に来られたのも初めてのことでしょう。
そしてその風貌を見る限りでは金銭なども所有していないように
お見受けする」

ま、まで……貴様と言うやつは……！！

「『なんでも屋さん』に初依頼だ。私たちと共にもう1人の御使い
殿を探してはくれぬか？」

絶望した！資本主義社会の世の中に絶望した！！

そうだ、俺は今無一文。これじゃあ今日の食いぶちすら危うい。

そんな中で依頼とあっちゃあホイホイ行くしかまい。

でも、でもこのままではなし崩し的に天の御使い様扱いを受ける可能性もある、それはいやだ。

俺のモットーは慎ましやかに、和やかに。

血を血で洗うような闘争をするつもりは無い。しかし、天の御使いという名前がそれを許さないだろう。

何故、天の御使いなどと言うもの……それも占い師が言った言葉なんぞを鵜呑みにするのか？

恐らく、ここら辺の地域は荒れに荒れているせいでそういった妄言染みた言葉すら信じたい……藁にもすがる思いなのだろう。

はつきり言って、俺はただか便利屋風情で碌な教養もない。

故に幽州？郡などという地域もしらないが、恐らく紛争地区なのだろう。

しかし、銃器を知らないというのは些か遅れすぎではないだろうか？

……兎にも角にも、天の御使いと言う名前を受け取ると碌なことにならない。つまりこいつらに着いていくと碌なことにならないことは自明の事である、はい論破。

そんなわけで。はい三、二、一。
スリー ツー ワン。

「是非、お供に」

——俺は、半月ぶりに土下座した。

飯には、勝てぬ。

・・・

「見て下さい。あの流星、間違いなく『天の御使い』だと思われますよ」

風が空から落ちる二つの流星を指差した。

成程、管輅の占いは本物だった、ということか。

こんな真昼間に星が煌めくというのも面妖なものだが、天の御使い殿ならそのくらい容易いのだろう。

「では私は先にその天の御使い殿と相見えてこようか」

「そうですね、万一悪い人だったら困りますしね」

「ではお言葉に甘えまして、よろしく願います」

もしその御使い殿が偽物であれば、風と稟に害が及ぶかもしれないな

い。

なら私が先行し、御使い殿をこの目で見極めよう。

自惚れるわけではないが、その辺の賊程度になら遅れなど取るつもりは無い。

その事を風も稟も理解してくれていたのか、特に異論を挙げる事無く私を見送った。

そんな訳で流星の落ちた先……二つあったがとりあえず近い方から向かうことにした。

しかし、辿り着いたと思ったら黄巾党と思われる3人組に一人の男が槍を突き付けられていた。

豚の模様の服とは何とも変わっておられる……。

基本的に黒髪が多い国の中で金髪、と言うのは少し珍しいがそこまで言うほど珍しいわけではない。

少し緑がかった瞳に二重の瞼。高めの鼻に小さな唇。

成程、確かに美丈夫とも言える端正な顔立ちだ。だが、体から漂う気だるげな……なんか自堕落してそうな雰囲気全体を台無しにしているように感じられる。

しかも手にはよくわからない黒い何かを持ってはいるものの、それだけで動く気配を見せない。

まさか、あの槍に脅されて動けずにいるということか？

「彼の者がどういった人間かはわからぬが……助太刀しようか」

話はそれからだ。そのように考え、私は見晴らしの良い岩の上から飛び降りた。

「あいや待たれよ!!」 「残っ……!!」

ん? 何か言ったか?

・
・
・

「畜生、畜生」

俺は心の底から憎々しげな声をチョーに向けた。

飯を盾に取られちゃついていくしかないじゃないか。

貴様が飯をちらつかせなければ諦めも付いたが、片やこの土地に
関する情報と飯で片や何も知らない状態での村探し（飯無し）。

即決だよ、畜生。

対するチョーはヒョーヒョーとしてる。畜生めが。

いつかぎゃふんと言わせてやる。

「ぎゃふん」

「ち、ちくしょう……!!」

完全にチョーの奴に良いようにされている。

背後ではギーさんが鼻血を吹いている。

なんだこれは。なんなんだこれは。

とりあえず一番話の通じそうなテイさんに話を振ることにした。

「テイさんや、テイさんや」

「はいはい、トントン〜っと。どうしました、アルさんや」

「天の御使いとやらはどこにいるのか知ってるの？」

この質問に対し、テイさんはさも当然のように言い放った。

「ここにいるじゃないですか」

「や、俺じゃないよ、別の天の御使い」

「……」

え、何その間？

「……ぐう」

！？

「テイさんや、朝ですよ。起きて下さい」

「ふわぁ……あれ、アルさん。お早うございます」

「早くないよ、昼過ぎだよ！！」

それより、御使い様はどこに行っただよ！？

依頼内容は『御使い様が見つかるまで行動を共にする』だぞ！？
あんたらが流星を見たから方向はわかるとか言うから付いてきた
のにどゆことよ！？

「いえいえ、この辺に落ちたのは確かなんですけどね」

「……時間もかなり経過してますしね」

テイさんとギーさんが不穏な事を……。いやいや、それなら二手に分かれてりゃよかったやん？ 集合場所決めてさ。

え？ もし御使い様が偽物だったらどーするって？ あー、そういう可能性を踏まえて、テイさんやギーさんみたいな非戦闘員は後から来させたわけねはいはい。

「てことはつまり……？」

「しばらく私たちと行動していただきますよ、御使い殿？」

うわあああん！！

飯もらったら帰る！ と言いたいところだけど一度請け負った依頼を放棄するのは俺の沽券にもかかわるし、今後の仕事に関する信用も失う！！

こいつらが変な噂流して俺の仕事邪魔するなんてこともありえそうだ！！ だとしたら手伝うしかない！！ だとしたらこのまま天の御使い扱いになってしまう！！

「うー！ うー！」

「そのうーうー言うのをやめなさいっていつも言ってるでしょ」

言葉にならない怒りが思わずうなり声になって表れていたが、チヨーは歯牙にもかけない。畜生。

雇用主には逆らえないからか、既に上下関係が出来上がっていた。

「……はあ、腹くるるかー」

まー仕方ない、か。

あんまり気は乗らないけど請け負ってしまったんだから、文句言うのは止めて素直についていくとするか……。

「ふふん、最初から素直に従っておればよいのだ」

……やっぱムカつく。

・・・

「依頼されたから付いて行くんだからな！！別に飯にありつけるなんて思っていないからな！！勘違いするなよ！！」

「おや、旅も長引きそうだというのに報酬は前金と後払いだけで良いというのですな？」

ここ周辺には村は無いと記憶している。故にここに来る前に保存食はたっぷり買ってきていた。

つまり金しか受け取らないという事は金を使える場所にたどりつくか、商人にでも出くわさない限りはご飯を食べられないということだ。

アル殿はその事に気がついたのか、すぐさま訂正をかける。やはり頭の回転も速いらしい。

「え、えっと、腹が減ってはなんとやらと言うからな！食べ物も貰ってやるからな！！」

ふふ、見た目もさながら中身も面白い御仁だ。

からかいがあr……いや、話していて楽しい。

そして先程は気だるげで自墮落と評していたが、私はそれに関し
て一部訂正をしなければならいだろう……普段はまさにその通り
なのだが。

黄巾党の3人を追い払った際に見せられた、技。

確かにあの3人の持っていた槍は非常に粗悪なものであれを叩き
折ることなど容易だし、私にだって出来る。

しかし、問題は彼の動きだった。

はつきり言って目で追うので精いっぱいだったのだ。

短刀と呼んでいいのか反応に困る形の刃物を扱っていたようだが、
事を起こす直前までは完全に構えを解き、脱力した状態だった。

あの状態から一瞬で槍3本を切る程の速度で腕をふるったとい
うのだから驚きである。

それに、あの一瞬に彼の腕から感じられた妙な気……。

気で力の底上げをする、と言うのは聞いたことがあるのだが、あ
そこまで凝縮されているものを私は初めて見た。

……知りたい。あの力がなんなのか。

私はその一心で彼を引きとめたのだ。

効果は覲面、彼は文句を言いつつもやや素直に着いてきてくれた。

さあ、とりあえず手合わせでも——」

「あらやだ、あの子考えてる事をそのまま口にしていらっしやいま

すよ。

「どう思われますか？ ティさん、ギーさん」

「一先ず、アルさんは御自分の身の心配を為された方がよろしいのでは？」

「手合わせをし、思わぬ事故でくんずほぐれつしたあげく色んなところを触ってしまったアルさんは、その責任を取るべく星さんと……ブハッ！！」

しまった。

しかしバレたなら仕方ない……からかうのは好きだがからかわれるのは嫌いなのでな、ここは先手を打たせてもらおうか。

私はおもむろに槍を天へと掲げると、一気に地面に振り下ろした。実際に地面に叩きつけるわけではなく、その直前で止めたのだが、槍の圧（槍圧？）によって少しばかり土煙が舞うものの、演出には丁度良いだろう。

「分かってくれますか、では尋常にッ！！」

「え？ 嘘？ イヤだっつの、余所でやれ、余所で」

「問答無用！！」

「嫌あああああ！！！！」

雇用主と雇われだけの関係で終わらせたくない。

私は天から舞い降りた面白そうな男を仲間に引き入れる為に色々と関係を深めていきたいと思うのだった。

act 1. 夢落ちだったらどんなによかったか（後書き）

恋姫は原作未プレイです。故に大まかなストーリーも知らないしキ
ャラの口調も安定しないかもしれないです。

故に原作ぶれいくとかそういうあれどころか根本的にブレイク状態
なのを念頭に置いてもらいたいです。

更新もこれは気晴らしに書いてる感じなのでそんなに早くないです。
感想あったらどしどし下さいな。

act 2. 愛を取り戻せ（前書き）

今回の話、と言うか前話もそうだけど主人公は終始「豚さんパジャマ」を着ているという事を念頭に置いてほしい。

act 2. 愛を取り戻せ

情報と人が集まる所と言えば、洛陽だ。

そう言われて地図を見せられた瞬間、驚いた。

どこだ、ここは？

教養の無い俺と言えど地図の一つや二つ見た事はある……。

形としてはアイジエン大陸に近いのだが、洛陽とやらの位置と記憶にあるアイジエン大陸の位置を照らし合わせると、とてもじゃないが人が集まる場所とは思えない。

はつきり言ってたただの密林。原生植物とか幻獣とか探すような地区だと記憶している。

そんな場所をこの国一番の都だ、などと言われるとやはり驚きを隠せない。

今歩いてる荒野が都ですって言われた方がまだ得心がいくつてもんだ。

まさか、本みたいに異世界に飛ばされたりとかなんとか……クロ口がそんな小説読んでたっけ。どうでもいいや。

そんな突拍子も無い事ありえんだろ。

まあもし仮に異世界だとしても別に帰りたいとは思わないし。

どこに居ようとも俺は俺だ！（ドヤ）

そんな訳で先程の驚きはそのまま呑み込んで3人に着いていくことにしたのだが、その前に3人は行きたい場所があるらしい。

「陳留、ね……情報皆無な今、どこ行っても大して変わんねーし俺は構わんよ。」

雇い主の意向に逆らうほど仕事を馬鹿にしちゃいないしな」

何やらチョーにテイさんギーさんの三人は自身が仕える主を見定めるべく諸国を練り歩いているらしい。

本格的に異世界のかほりがしてきたけど信じてもらえないんだろ
うな。信じてもらわなくていいけど。

そんで洛陽から東にある地、陳留ってところにその主様候補とやらが居られる（一応敬語）ようだ。

「ソーⅡモートクね。変わった名前だな」

「私からしたらアル殿の方が変わってるがな」

見解の相違、価値観の違い。異世界である、と言う事を念頭に置いて考えると色んな物事があれよあれよと納得出来てしまう。

そう言う世界だから、そう言う文化だから、と言ってしまえばそれでおしまいなのだから。

ってことはテイさんの謎一人称も何かそういう文化なのか？

「ところでテイさん、その一人称はなんなの？キャラ作り？」

「む、失礼ですね。風の一人称は真名に決まってるじゃないですか」

フウはマナ？どんな暗号だ？どゆことだ？

「マナって何だ？」

「「「えっ」」」

やっぱり文化の違いって怖い。言葉が通じてるだけかもしれませんが、この分だと文字も読めない可能性もある。ていうかその可能性大だ。さっき見た地図も手書きのものでところどころに暗号みたいなものが書いてあったけど、あれ暗号じゃ無くて普通にこの国の文字なんじゃね？

「うちのところじゃマナっつー概念は存在しないんだけど」

「成程……だとしたらアル殿は運が良い。これで風の真名……『風』の名で呼んでいたら切り捨てられてもおかしく無かったところだ」

「マジかよ、物騒な文化だなオイ」

「物騒とは失敬な。真名とは各個人に与えられる神聖不可侵なもので、真名は許しを得た者しか呼べないんですよ！」

ギーさんが真名について熱弁しているが、やっぱり物騒だと思う。そんな神聖なもんだったらホイホイ口に出さずに心の奥底にしまっておいてほしいな。

所詮人の名前なんぞそいつを識別するための代名詞に過ぎないんだから。こうやってさっき出会ったばかりの人間も居るんだしうっかりその名で呼んでたら危ないじゃないか。

3人の解説を聞いてるうちになんだか知らん間に死亡フラグを回避していたことに気づいて肝を冷やす俺。

神妙な顔つきになったからか知らんがチョーの奴がまたなんか悪そうな顔をしている。

「ひょっとして、アル殿だけ真名を教えられてないから嫉妬しておられるのか？」

もー。それならそうと早く申し上げて下されば云々。
何言っではるんですかチョーさんってば。

雇用主と雇われの関係に水を差すようなことはしませんよ。
信用してもいいが信頼までいくと面倒だし、かといって信用すら
されないのも問題だ。

故に信用するくらいが丁度良い。そんな真名とか言う大層なもん
を渡されても困るのは俺なのよ。

「いやいや、俺は所詮雇われの身。必要以上にあんたらの領域に踏
み込む気は無えよ」

そういうわけだからバツサリと切り捨てておく。

こいつらは変わった性格をしてるが、悪い奴らじゃないし気の許
せる奴らだ。だからこそ個人の領域を保っておきたい。

するとなんかチョーの奴もテイさんもギーさんも微妙な顔してる。
なんだ？

「アルさんって、公私はしっかり分けるんですね」

「ギーさん、それちょっと酷くない！？」

果てしなく意外。

そんな目で3人は俺の事を見てくるので思わず声を荒げてしまっ
た。

金をもらう以上、仕事はきっちりしたいし余計な禍根も残したくない。立つ鳥跡を濁さずって奴だ。

チヨーはなんか不服そうな顔をしているが、スルーだ。スルー。碌な事考えちゃいないな、きつと。

「ま、とりあえず真名についてはわかった。人の名前を聞くときはその名が真名かどうか逐一確認したらいいのな」

「そういうことですね」

「それはそうと、その陳留まではどのくらいかかるんだ？」

「そうですね、現在地がこの辺ですから……」

ワイワイガヤガヤ。この感じだとやっぱり依頼完遂まで時間かかりそうだけど、飯は大丈夫そうだ。

そんな風に思考する中で、視界の端に見えるチヨーだけはなんだかやっぱり不服そうだった。

・・・

アル殿は驚くべきことに真名というものを知らなかったらしい。当たり前のように真名についてを口にしなかった為、天の国にも真名は存在すると思っていたのだが、それはたまたまそう呼ばなかっただけのようだ。

その話題になった時、私は正直真名を許す良い機会だと思った。真名とは神聖な物で、気を許した者にしか教えてはならない物でもある。

アル殿は頭が良い。真名に関する説明を聞いたうえで私の『星』

の名を受け取ったら最早雇い主と雇われの関係ではいられまい。

そして私はあの気についてじっくりと教わり一騎打ちをしてもらうのだ、ふははは！

などと画策するところまでは良かったのだが、驚くべきことにアル殿はと言うと。

「いやいや、俺は所詮雇われの身。必要以上にあんたらの領域に踏み込む気は無えよ」

しまった！先手を打たれた……風と稟はその言葉に納得したように頷いているが、それだと私の作戦が全部つぶれてしまうではないか。

こうなってしまうては真名を無理矢理受け取らせるのも不自然に思われかねないし……。

そんな私の思考を知ってか知らずかアル殿は全くの知らんぷりを決め込んでいる。

……よろしい、ならば戦だ。

意地でも真名を受け取らせて見せる。私はひそかに決意し、その意思を目にたぎらせるのだった。

・・・

歩きに歩いて早2日。

最早この荒野にも慣れた。

そう言えばパジャマだったのに靴はちゃんと履いてあった。
あまりに自然に装備されていたのでそこまで思考が行きつかなか
ったのが原因だろう。

別に異世界とか元の世界とかそういうあれはどうでもいいんだけ
ど、だれがこんなことしたのかは気になる。

まあ、この3人に着いていく傍らで考えるところ。

思考を今後の俺に丸投げすることにして、結局ここ二日は美人3
人組（1人はちっこいが）との旅路を素直に楽しんでいたのだが。

「おうおうこないだはよくもやってくれたなあオイ！」

「し、しかも可愛い女の子を3人も侍らせてるんだな」

「兄貴！ やっちまいましようぜ！」

なんか沸いてきた。しかも仲間を引き連れて。

チョーもテイさんもギーさんも何かあきれた表情を浮かべていた。
とりあえず、あれだ。

「チョーは2人の護衛を頼むわ。雇用主の槍に血をつけさせるわけ
にはいくまいて」

ていうか、こういうところで働かないと俺はただのヒモだ。それだ
けは絶対やだ。

「しかし……ざっと見て20は居るが、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題無い」

腰に差してあったベンちゃんを手に取り、練を練り上げベンちゃんを周で覆う。

はつきり言っただけを知らない相手に念を使うのは御法度なのだが、そうも言っただけならいいだろう。

何せこいつらは、如何なる理由があろうとも雇用主に殺気を向けたのだから。

「さて、死にたい奴も死にたくない奴もかかってこいよ。或いは一太刀浴びせられるかもしれないぜ？」

嘲るような笑み。それを笑って無視できるような人間がこんな荒くれ者にはならないだろう。

「「ぶっ殺す！！」「」」

案の定頭に血を上らせたわけだが、そんな馬鹿の相手など容易いわ、戯けめ！

そんな訳でベンちゃんに更なる念を込める。

ベンちゃんの柄に刻まれた神字が反応し輝きを増す。

さて、殺すつもりは無いから半日くらい眠っててくれ。

「『押し売り毒林檎』！」
ボイスンメデイスン

設定は「眠り」効果は「半日」。

さてさて、まずは一番近くのノッポ君！

凝で6割両足に、4割をベンちゃんに持っていき足を踏みぬき一

気にノッポに接近する。

リーダー格をつぶすのは基本だからな。慌てるノッポの足を払うと転んだノッポにナイフを肩に突き立てる。

「グエッ！」

こけた時に変な声を出すノッポだったがそのまま安らかに眠り始めた。

うむ、異世界ながら効力はバッチリだな。

「な、なんだあ！？」

「ノッポ起きろよ！どうして寝てんだよ！！？」

「こ、こいつヤバいんだなあ！！！」

数に頼る戦いで分散するたあ馬鹿だねえ。

念能力者相手に立ち回するには高威力の武器を使うか、数をうまく配置し隙を衝く。

ただただ数に頼るだけで俺に勝てると思ったたら大間違いだ。

なんでも屋さんは俺が社長兼従業員状態……詰まる所、一人だ、ぼっちだ。

故に対多数で戦うことも多々あったし、嫌でも慣らされた。

この感じだと念も必要なさそうだが、実力差を理解させる必要がある。もう二度と関わらせないように。

「いっせーのー、っせー！！」

今度は両足6割だったのを右足6割に集中させて高々と跳躍する。

そのまま黄巾党（頭に黄色い布巻してるし多分そうなんだろう）とやらの中心点に凝で念を集中させた右足を叩きつけた。

あー、硬とまではいかないけど思いつきり岩をぶん殴ると気持ちいいわー。

豆腐みたいに碎け散る岩。しかし豆腐のように柔らかいわけではなく一般人にはふつーに固い。

弾ける岩をまともに受けて無事なはずは無い。

近くに居た黄巾党の5、6人を巻き込んで岩が吹き飛んで行った。

「やべえ、やべえよこいつバケモンだ!!」

いや、ウヴォーの超破壊拳ビックバンインパクトの方がヤバいから。この程度でバケモンっておま……。

待てよ？よく考えたらここは異世界。念って概念が存在するのか？

だが、念は生命エネルギー。人ならば誰にだって存在する。

って事は『念』って名前じゃなくても似たような考えがあるかもしれないねーな。

だとすると、その辺もちよつと調べとくか……念使いがいたらヤバい。何がヤバいって俺の生活がヤバい。

相手が俺の『天の御使い』の名を利用するような人間だったら面倒だ。

ってなんで既に天の御使いルートが確定してんだよ！

「まずはそのふざけた幻想をぶちころす!!」

残った奴らの殲滅だ。

周はそのままに練も維持する。

先程のような跳躍は出来ない物の、乱戦には持つてこいの堅だ。

急所を避けるように、腕や足を軽く切りつけて回る。それだけで眠りに落ちていく。

その様子を3人は啞然とした感じで眺めているが……まあ、わかるはずもない、か。

と言うか能力の概要は教えてもいいが、制約と誓約は秘密だ。

ぼけーっとどうでもいい事を考えながらも、斬る。殴る。投げる。蹴る。共通しているのはきっちり眠らせるために最後にはナイフで軽く切っているという点だろうか。兎にも角にも全員おやすみなさい。

流石に全員を一気に倒すには武装が足りないんで出来ない（そう言う能力を作ればよかったと少し後悔している）。それ故に俺から運よく離れていた奴らがチョー達へと向かおうとしていた。

それを見たチョーも身構え、槍を構えるが、チョーを働かせるつもりは皆無だ。これはなんでも屋さんとしての矜持的なサムシング。

「へっへっへ、ここを通りたくば俺を倒すか通行料をいただこうか」

チョー達へ向かっていた黄巾党には思い切り石を投げつけてやった。ストライクッ。

「アルさん、なんだかその台詞だと私たちが悪者みたいになるじゃないですか」

「テイさんや、この世には正義も悪も存在しないのだよ。あるのは勝者と敗者だけだ！」

ラスト1人、さっくり肩を裂いて終わりだ。おやすみなさいっと。俺が念を解いた時、この場に立っている者は俺達4人しか居なかった。

・・・

右に行くと思せかけて左。多分その見せかけは黄巾党の男共には見えていないと思う。

結局アル殿の動きについていけない以上、男共も対応も出来ないだろうが。そしてそのまま3人を斬りつける。

背後からの振り下ろしを前方に向かって逆立ちするように回避すると、両足で攻撃を仕掛けた黄巾党の首根っこを掴み宙へと放る。

更に前方から向かってきた2人に対しては逆立ちをしたまま両手を軸に回転。かなり強烈な足技を受けた2人は周囲を巻き込んで吹き飛んでいった。

2人が倒れ伏したその上からは先に宙へと放られた黄巾党の男が降ってくる。

それで十分だというのに、アル殿はなぜか最後に必ず短刀でとどめ（ちよっと切るだけのようだが）を刺している。

そしてアル殿の短刀を受けた者たちは、たとえ痛みに呻いていようが一樣に眠りに落ちていた。

……妖術か何かか？

アル殿の戦闘中における気の密度は見るからに凄まじい。腕で攻撃するときは腕に、足で攻撃するときは足に気が集中し、最初の跳躍からのかかと落とし等は目を見張るものがあつた。やはり気を自由に操る、と言うのがアル殿の力なのだろう。

更に言うなら、常にアル殿の短刀には気が巡っていた。

と言う事は、だ。

私も気を操る技術を得ることができたのならこの槍の威力、大きく上昇するに違いない。

……その技、何においてもご教授願いたいところだ。

槍の扱いを比べさせれば私に並ぶ者は無い、とまで言われたが、私はもっと強くなりたい。

時は乱世。

ならばそれを終わらせてくれる英傑の下で、その槍を振りたい。その為にはアル殿から気の扱いを伝授してもらふ必要がある。

楽しみだなあ。ああ、楽しみで仕方ない。

「くふ、くふふふ……」

「……星さんがおかしいです」

「……ぐう、ぐう」

後ろで2人が何やら言っているが、気にしない。

周りが見えなくなるほどに、私は目の前に広がる可能性に魅せられていた。

「終わったぜーっと」

そして彼は帰ってきた。

これでもかと言うくらいに気で満ち満ちていた彼だったが、今はその成りを潜めている。

いつもはこんなに気だるそうなのに、どこからあのような力が……と、私はワクワクを隠しきれずにいた。

・・・

4人旅を初めて早5日。もうすぐ陳留にたどりつくらしい。

楽しみだ、久々に旨い飯が食べそうだし。保存食を前に、「これが今日の晩御飯だよ……」「かーちゃん、かーちゃん！もう干し肉はやだよー！」「やだー！」「こら！我慢しなさい！お母さんだって頑張ってるんだから！……ごめんね、お母さん」「いいんだよ、ほら。お母さんの分も食べなさい。お母さん、今日はおなか減っていないから」なんていう小芝居もしなくていいんだな！？

なんでそんな小芝居するのかって言われても困る。

なんていうか、旅路で娯楽が無いからこういう形でバカみたいなお事しないと飽きるんだよね。

そして実際にお母さん役のギーさんの干し肉を食べるとギーさんに怒られるから、ちゃんと返却する。何という不毛。

でも、そんなあれともおさらばだ。だってもう陳留だもんな。

だけど、一つだけ気になる事があるんだ。ずっと気になってたけど、質問できないでいたの。

「テイさん、ギーさん。ちょっと良い？」

「「はい？」」

「なんかさ、チョーからの視線が気になって仕方ないんだけど、自己意識過剰ですか？そーですか」

ここ数日、正確には黄巾党20人をオネムにしてやって以来、チョーの目が猫が獲物を狙うかのような目をしていてちょっと怖い。俺は猫に目をつけられたネズミってところか。あの戦闘後、黄巾党の連中を眠らせた技についてすごい聞かれたけどそれに関しては黙秘させてもらっている。

その時はそれ以上追及される事は無かったのだが、あれ以来だ。チョーが時たまギラついた視線を送ってくるのは。

何かあるなら、言えば良いのに。雇用主なんだしさ。

それはさておきだ。

とりあえず、陳留の前にちっさい街があるらしいからそこで一泊した後、一息に陳留まで行こうぜと言うのが俺らの今後の行動指針である。

「ソー||モートクか……どんな奴なんだろうな。ていうかテイさんにギーさんや。」

2人はそのソーさんが2人の御眼鏡に叶う人間だったなら、そのまま仕えるのか？」

一応、契約してるのはチョーとだから、チョーが陳留にとどまると言うのならまあ、天の御使いを探す事は無いつてことで契約破棄するかどうか決めてもらうところだが、2人に関してはそうではない。

「どうしたんですか？あ、ひょっとして風達が居なくなるのが寂しいとか？」

「星さんと二人きりになったアルさんはそのまま星さんと……ブハッ！！」

「はいはい、トントンですよ」

……まあなんだ、その時になって決めてもらえばいいか。

そうこうしてるうちに噂の街が見えてきた。風景は山と岩と荒野で飽きていたところだからテンションも上がる。

そして何より、たまに見つけた川で体を洗う程度だったものだが、これでしっかりくまなく体の隅まで洗いつくせる！！

綺麗好き、ってわけでもないけど流石に汚いな流石長旅汚いって感じなんだよ！！

「へっへっへ、とりあえずこのきったねーボロパジャマともおさらばさ」

そう、俺はこのたびの間ずっと豚さんパジャマで過ごしてきた。これなんて罰ゲーム？

豚さんパジャマは相棒ともいえるが長旅でずいぶん汚くなった。悪いがここでお別れだ……豚さんは犠牲になったのだ……犠牲にな

った俺の犠牲になったのだ……。

街の門が近づくごとに上がるテンション。自然とスキップにもなる。

3人が軽く引いているが、そんなもの関係ない。

「ひゃっはー！俺が、俺達が旅人だ！」

ちよつとテンションが上がりすぎたために、街の異変に気付かなかった俺だが、門を前にしてようやく気がついた。

「……ナニコレ？」

無理矢理門を壊したような跡に、門から見える街はボロボロである。

建物には穴があいているのが当たり前、ひどいになると焼け野原状態。

そして絶望のどん底に落とされたような表情を浮かべる街の住民。

「……十中八九、黄巾党の仕業だな」

そんな中、不愉快そうな顔でチョーが眼の前の状況を一言でまとめる。

「……あ？」

黄巾党ってこないだのあの馬鹿ども？あんまり馬鹿っぽいから普通に放置してきたが、成程。

「あのクソ共は殺した方が世の為人の為だったってか」

「殺す、とは穏やかではありませんな。御使い殿」

「ま、次に会ったら容赦なくボコにするか」

不愉快な気分ではあるが、一先ず状況をまとめたいし情報も知りたい。

そんなわけで壊された門から街に入るが、やはりというかなんというか。

よくもまあこんなに壊したもんだな、と思う。

チョーの言ったとおりだ。技術が進歩してようがしてまいが、人は変わらない。

いつだって勝者が敗者を蹴る。勝者が正義で敗者が悪。全く、世知辛い世の中だ。

「……旅人の方ですか？」

イライラをなんとか飲み込もうとしていると、住民A（仮称）が話しかけてきた。

傷口を開くようで悪いが、今は情報が欲しい。

「そうですね、その通りです……申し上げにくいのですが、この状況は……」

「……皆さんが思われる通りです」

「なるほどね。……それで、ここのお偉いさんは何してんの？」

「……」

俺の言葉に住民Aは目をそらした。成程、逃げたか。全く使えま
せん。――

敗者になるのが嫌ならば、勝者になり替わるしかないだろうに。

ま、逃げた奴の事を考えても仕方ない。それも一つの策だろうし。
それよりも今気になってるのはだな……。

「それであんたらは何やってんの？街の復興は？防衛の強化は？や
られっぱなしで泣き寝入りするのか？」

「……お言葉ですが、余所から来られたあなたに何がわかるのです
か？何百、何千もの武装した黄巾党が、一気に襲いかかってくるん
ですよ？！

勝てるわけ無いじゃないですか！！」

なるほどね、なるほど。こいつら負け犬根性染みついてやがる。

黄巾党もムカつくがこいつらも同等にムカつくわ、マジで。

「それで殺された奴らの思いはどうなる？やられっぱなしで泣き寝
入りして、守りたいものも護れなくて、結局殺される。

お前らがあの世に行った時、ダチに、家族に、胸張って会いに行
けんのか？戦う事を諦め、敗者である事を受け入れたお前らが？笑
わせんなよ」

「アル殿！！」「アルさん！！」

今まで黙っていた3人が思わず声を荒げ、俺をなだめようとする
が駄目だ。それがたとえ見知らぬ他人でも。

いや、見知らぬ他人だからこそムカつく事ははっきりムカつくっ

て言ってしまう性分なんだから仕方ない。

あっちの世界の奴らは、死を恐れない。ただ『負ける事』を恐れていた。だからこそ毎日を全力で生きて、全力で死んでいった。

だがこいつ等は違う。ちよつと脅されただけで諦め、受け入れ、殻に閉じこもる。

「誰が殺されたか知らねえが、そいつにも夢の一つや二つあったんじゃないか？」

それがあっけなく、さも当然のように奪われ、そして生き残ったお前らはその思いを無視してるわけか。

死んだ家族の亡骸が囁いてんぜ？許せない、俺を、私を、僕を、僕を、殺したクソ野郎が許せないってな。

復讐は無意味だ、なんてズレた事ぬかす奴を俺は見た事があるが……別に無意味で良いだろう？

殺された奴らが奪われたモンは、命だけじゃねえ。死ぬことは誰しもに平等に与えられた自由だ。

それすら奪われたあいつらは、人間じゃねえ。家畜以下の存在だ。それでいいのか？

……良い訳ねえよな、憎いよな？お前から、お前から家族を奪った賊の事が」

「……だったら、どうすればいいんですか！？この憎しみを、怒りを、悲しみを！！どうやってあの黄巾党にぶつければ良いんですか！！？」

「よしその調子だ！！憎いならそのままぶつけろよ、悲しいなら泣き叫べよ！！」

死んだって良いだろうが！ただ無為に殺されるのを待つよりか、あいつらの喉笛に噛みついて死んだ方がカッコ―死に様だと思っぜ

!？」

俺と住民Aの口論を聞きつけた野次馬が続々と集まっていく。目立つのは嫌いだがアドレナリンがマックスだったせいかなガンガン思った事を叫ぶ。

俺の世界に居た奴らは、確かに屑も多かったのだが、確実に『人間』として生きていた。

「生きる事に必死になるのは悪くない。だが時には死に急ぐ事だつて必要だ。

人間なら、憎い相手にその怒りをぶつけるべきだ!!
どうして奪った、どうして殺した、どうして、どうして!!」

「それをやってこそお前らは、死んでった連中は初めて人間に成れる!!」

取り戻せよ!金を、命を、食い物を、誇りを、仲間を、家族を!!」

集まった住民たちの目に光が灯る。

それは多分、生きるための決意ではなく、死んでいった者達を想う光。暗い闇のような光。その光こそ、人間の証。

「そして偶然にもこの場には俺が居る!! お前らが望むなら、お前らが依頼するなら、請け負ってやるよ!!」

飼い猫探しから浮気の調査、果ては復讐だって依頼主が望むのであれば肩代わりしてやる!

俺の名は『なんでも屋さん』、アルIIプライドだ!! 今後ともヨロシク!」

……決まったな。なんつって。

・・・

流石天の御使い、とでもいおうか。

全てを諦めた住民を奮起させ、一つにまとめ上げた。

しかも今までの気だるげな雰囲気はどこへやら、あの時の戦闘で見せた物よりも更に尖った……鋭利な刃物を突き付けられているような錯覚に陥る程の剣幕。

言葉尻はとても汚く、はっきり言って耳をふさぎたい程に人間の汚い所を集めたようなものだったが、その『汚い』所こそが人間たる所以なのだと言う。

成程、と素直にそう思った。

認めたくは無い、人間はもっときれいなものだ、どんな悪事を行った人間だって罪を洗い流す事が出来る。

今まではそのような事を思っていたが、殺された側の人間がそれを許すはずがない。

憎しみの連鎖は、どこかで止めなければ終わらない。

そんな事を言えるのは奪われた事のない、安全圏に居る人間だけなのだろう。

現にアル殿の言葉を受けた住民達は、自分を取り戻すため、家族を取り戻すため、憎むべき相手を想っている。

この光景を見せられて尚、「復讐なんてしても死んだ者たちは帰ってこない、無駄だからそんな事は止めて前を見よう」なんて無責任

任な事を言えるはずがない。

前を見て歩くには、全てを奪った奴らから全てを取り戻さなければならぬ。

一瞬にして住民を死兵の如く決意を固めさせたアル殿だが、策はあるのだろうか？

そんな事を考えていたらアル殿から声をかけてきた。

「悪いな、二重契約になるがあいつらの復讐、肩代わりさせてもらうわ」

「ああ、別にそれは構わないが……って、んん？」

肩代わり？ 肩代わりって事は……。

「1人で行く、という事か？」

「いや、まあ勝手に煽って勝手に死ねってのもずいぶん無責任だねって思うしな」

先程の住民の話を聞いていなかったのか、この人は。何百か何千か、住民の話だと恐らく千はくだらないだろう。

数日前に20人を相手した彼でもそれは無理だろう。そんな事が出来るのは呂布位のもんだろう。

「ま、『なんでも屋さん』は何でも出来ないと言えないうてな」

せいぜい殺ってやるよ。と物騒な言葉と共に彼は笑った。

「……死ぬ事が怖くないのですか？」

「いや、負けたまま生きる事の方が怖いな」

彼の事が少しだけわかった気がする。

生来の負けず嫌い。

気だるげな態度に私たちと一定の距離を取り続ける理由。

公私を分けると言う事も一つの理由なのだろうが。彼は多分、奪われる事を恐れている。

以前、誰かに何かを奪われたからこそ分かる、奪われた者の気持ち。

彼は復讐を果たせたのだろうか。

……それはただの私の思い込みに過ぎないけど。

いずれ彼との距離を縮めた時に分かる事もあるだろうし。

「雇われのアル殿が死地に赴くのなら、雇用主の私もそれについていかなばなりませんな」

「えっ、なんで？」

「天の御使い殿を探すという依頼を放棄して死なれては、アル殿の沽券に関わるのでは？」

「……死んだ後の事まで考えきれないですけど？　つーか死ぬ気ないし」

「それに、相手は数千の兵。私の力を見せるにはちょうどいい機会と思いましてな」

「いやいや、チョーは超強いから！　チョー強い！　だからここは帰れ、な？」

「――帰るところは、いつだって戦場だった」

「カッコイイこと言って誤魔化さないの！」

むう、アル殿は意地でも1人で行くつもりか。そうかそうか。

「ワカリマシタ、イッテラッシャイマセ（棒読み）」

「え？　あ、はい……」

彼は突如態度を変貌させた私を訝しがりながらも、なにか準備があるのか私の下から離れていくのだった。

そして私たちの対話を終えたのを確認したのか、風と稟がこちらに駆け寄る。

「良いのですか？　アルさんをあのまま行かせても……」

「大丈夫だ、問題無い」

そう。私には秘策がある。秘策と言うほどのものでもないが……。怒りを抱えた住民と、風と稟と言う名の敏腕軍師。

天の御使いと言う称号、彼はものつすごい嫌がっていたが、これを機に受け入れざるを得ないようにしてしまおう。

多分今鏡を見たら、これでもかと言うほど黒い笑みを浮かべた女が居ると思う。

それほどまでにニヤツと笑った私を見た2人は、若干後ずさっていた。

・・・

「復讐とは、加害者が被害者と同じ目に遭わねばならない」

「「は、はあ……」」

俺は第一回簡単にできる復讐講座を開いている。

雇用主には俺がなにをするのか知ってもらわねばならないからだ。

「故に全部を殺す事はしない。

生きて……生き残ってしまった事を後悔するほどの恐怖をすりこんでやらねばならないんだ。

所謂生き地獄って奴」

そこで癡猛な笑みを浮かべてみると、住民達は若干……いや、かなり引いていた。

「まあやる事は簡単だ。どうせあいつらまたここに来るんだろ？堂々と迎え打ってやるよ」

「「!？」」

俺の言葉を嘘だと思ったのだろう、一気にざわつきが広がったのだが、聞いたところ奴らは剣だの弓だの槍だのと、近代兵器のきの字も使わないらしい。

ならば話は簡単で、より凄惨に、よりグロテスクに、より苦しむように殺してやろうじゃないか。

それを為すための力と、方法は存在する。

「そういうわけだから、誰か鍬とか持ってない？」

どういうわけなんだ、と自分でも思ったがそれはともかく、近くに居たちっこの女の子が鍬と共に……え？何この鉄球？どんだけ力持ちなんこの子？

「ボクも連れて行って下さい！！」

あら可愛い。じゃなくてだな、どうしたの急に。そんな鉄球持つてちや危ないでしょ。

ほらそこのあなたもこの子を止めてくれよ。

「ボクも着いて行くからね！絶対ついて行くからね！！」

「つてもなー、チョーの奴が着いてくるの断ったからなー。お前だけ連れてくのもなー」

「ほらほらお嬢ちゃん、アル殿が困っているではないか。ここはいったん退くんのだ」

！？

チョーの奴がお嬢ちゃんをなだめている。ど、どういうことだったばよ……？

なんかチョーがお嬢ちゃんに耳打ちしたら納得したように下がるし……。ま、まあ良い。とにかく続きだ。

「まー別に策なんて大層なもんはねーけど、こう見えて結構力持ちなんぞな」

俺は受け取った鍬に周……それも凝で威力を底上げした状態で地面に叩きつけた。

当然、地面は爆発するように抉れ、鍬の周辺は隆起し、土煙が舞いあがる。

「お前らが復讐を望むクソ野郎共は、はっきり言って家畜以下のクソ野郎だ。

そんな奴らを殺す……いや、駆除するのに人様を殺すための剣やら槍やら弓やらを使ってもらえると思うか？ いや思わない。

でもまあ安心しろ、お前から何もかも奪い去っていったクソ共はきっちり耕してやるからよ」

その光景に啞然とする住民達だったが、それ以上に俺の笑みにビビったようで縮みあがっている。

この恐怖の何十倍もの恐怖を黄巾党に与えてやるんだ、むしろワクワクしてもらいうくらいじゃないと駄目駄目だな。

久しぶりの『殺し』の依頼に、少しだけ楽しみな俺だった。

act 2. 愛を取り戻せ（後書き）

アルIIプライド

変化系（具現化寄り）能力者。

『ボイズンメデイスン押し売り毒林檎』は念で作った毒薬とか普通に薬とか作ったりする。

ベンズナイフに刻まれた神字はそれを補助するもので、作った薬をベンズナイフに自動で仕込む事が出来る。

制約と誓約

一度に複数の薬を作り出す事は出来ない

現実には存在しない効力の薬は作れない

誓約はまだかんがえてな……いや、秘密です

勢いで書きあげたけど、厨二だなあ……

オリ主だけあって性格というか口調みたいなのも安定しないし

はっきり言って面白いですか？忌憚なき意見求むます

感想待ってまーす

a c t 3. 一寸先は紅（前書き）

何がかきたいんだ、俺って奴あゝゝ！

act 3. 一寸先は紅

愛鎌よーし、鎧よーし、鎧よーし。

鎧と鎧って何だか似てるわね。どうでもいいけど。

一先ず戦の準備は万端。賊の数は2000、こちらは1000。数では少ないが、こちらは精鋭であちらは言ってしまうえば雑魚。1000でも多すぎる程だと考えたが、確実に仕留める為だ。

問題は「兵糧を少なめに設定してある」という事実だけれど、苟々と名乗った少女……。

良い目をしていたし、何より良い覚悟だった（それに可愛い）。

あの子の才が本物なら、我が軍の軍師は彼女で決定ね。

武官も春蘭と秋蘭は頼りになるし、他は兵の中から見つけるか、在野の武将を探すかしていくしかないわね。

……多分、彼女はやってくれるでしょうね。

曲がりなりにも私が認めたのだから、その知略を私に示してくれるはず。

ふふ、夜が楽しみだわ。どうやって攻めてあげましょうか。っと話が逸れたけどまあいいわ。

……でも、でもね。

「だからあんたは馬鹿なのよ!! この猪武者!!」

「な、なにおー!!?」

「姉者、落ち着くんだ」

頼りにしている軍師と武官がこの有様って……。

「はぁ……」

不安だ。

果てしなく不安だ。

とはいえ彼女達の実力は先述した通り認めている。

だがしかし、それは飽くまでも個としての実力だ。

こうした集団行動で反りが合わないというのはかなり致命的で、個の力を著しく弱める恐れもある。

なんとか仲を取り持ってもらおうよう秋蘭に頼むしかないわね……。
黄巾党だけでなく、あなた達も私を悩ませる存在にならないで頂戴ね。

「準備は出来た？なら出発したいのだけど。街の人々が心配だわ」

「大丈夫です!!」 「はい、いつでも大丈夫です」

「真似すんじゃないわよこの猪!!」

「ムキー!!」

「落ち着つくんだ姉者」

「……はぁ」

私の小さなため息は、多分誰も聞いてないと思う。

・・・

「それでよお、俺あ言つてやったんだよ！」「その穴はケツの穴だ」
つてよお！」

「「ぎゃゝはっはっは！！馬鹿じゃねえの！？」」

良い気分だ。

飯は食ったし酒も飲んだし男も殺ったし女も犯った。

こんなに楽しいんだったらもつと早く黄巾党にはいつてりゃよかったぜ。

そして俺たちは今、馬鹿騒ぎをしながらも今日の目標まで向かっている。

先日襲った街だ。そこからしばらくとれるだけしばらくとる。

ここの県令は役立たずのクソだから一目散に逃げに行った。

しかし近くにはかの曹操とか言う奴が居るから、奪うだけ奪ってとんずらくく必要がある。

「てめえら、奪うもん奪ったらさっさとずらかるからなあ！余計なお遊びしてお偉いさんに捕まってもしらねーぞお！」

「「おおー！！」」

ま、相手は高々農民だ。

ちよいと武器ちらつかせて脅せば何の問題もねえ。

気に入らねえ態度をとれば切り捨てれば良いだけの話だしな。

おっと、もうそろそろ街に着くか……。

その時、俺は妙な人影を見た。

「……？」

しかし、気のせいだったのだろうか、一瞬ちらついた人影はすっかり消え去っていた。

「なんだ……？」

「「ぎゃあああああ……!!」」

瞬間、背後から轟音と共に仲間の断末魔が響き渡った。

は！？何だ何だよ何ですか！？

ありえねえありえねえぞ、この光景は！？

突然の事に馬も驚いたのか暴れちまって周りを巻き込んでいる。

クソッ！何が起きてんだよ！？後とりあえず馬落ち着け！！

馬をなだめている間にも土煙の中では仲間達の悲鳴が響き渡っていた。

一体何が、と考えると同時に俺は見た。見てしまった。

悪魔のような笑顔と、血にまみれた男の全身を。

そして俺の意識は、そこで途絶えた。

・・・

一応訂正と言うか言い訳みたいなもんをさせてもらうと、快樂殺人者ではない。

こう見えても念を修めた武人みたいなもんだ。戦いは嫌いじゃない。故に『殺し』の依頼はワクワクするんだ。

俺に『殺し』を依頼する奴は結構曲者が多くてな、色々大変だったんだぜ？ おかげで奇術師の戦闘中毒者にも目エつけられたし。

そんな訳で特にこう言った圧倒的不利な状況とかな、どうしても楽しくなってくる。

つつても相手は訓練もされてない雑魚だからやっぱりただの作業になりそうなのが少し残念なところだ。

ちよっぴり残念であるがそれはともかく、ファーストブレイクはいただいた。

後は浮足立っている奴さんを一人また一人と耕していくだけ。

人を殺すために研がれた剣はどんなに粗悪な物でもそれなりに斬る事が出来る為、良き使い手が扱えば簡単に死なせる事が出来る。

しかし、この鍬は違う。

用途は土を耕すことであって人を殺すためではない。

故に斬れ味など求められるはずもなく、それを人にぶつけたらどうなるか。

「おご……あ、が……」

俺の背後では腸をはみ出させながら呻いている黄巾党が居る。それを見てパニックだった奴が馬で逃げようと周りの連中を轢いて行ってる。

仕事を手伝ってもらってありがたいが逃げる奴は死ね。逃げない奴も死ね。

「はいはい、運が良ければ生き残れるから、それに賭ける事だな」

ざくり、ざくり。手を耕す。足を耕す。腹を耕し顔を耕す。

鍬が体に埋め込まれていく様を見せられて、男は叫び、俺は笑う。狂笑ともとれるそれは黄巾党のクソ共を恐怖のどん底に陥れるには丁度良いもので、男達は次々と逃げていく。

とりあえず、アジトを知るために何人か捕えておきたいので、丁度目が合ったりリーダー格っぽい男の意識を『押し売り毒林檎』で奪うことにした。もちろん、設定は眠りである。

「てめーら汚エ耳かっぱじってよォく聞けェ!!」

鍬の動きを止め、一喝する。

その叫びに一同は一気に静まり返った。

逃げりゃ良いのに律儀つつーかなんつつーか。ビビって逃げらんねーのか？

ま、好都合だけど。

「お前ら、今まで何人殺してきた？何人の人間から色んなモン奪ってきた？」

楽しいよなあ、弱者をいたぶるのは。楽しいよなあ、強者になった気分を味わえるのってのはよお!!

だけど、それも今日で終わりだぜえ!?! てめーらはやりすぎた。殺りすぎたし犯りすぎたんだよ!!

お前らに恨みを晴らしたいって奴らからの依頼でなあ、てめーらはここで死ね! そこらに転がってる肉片みてーに、汚く、血と糞と小便垂れ流しながらなあ!!!!

俺は足に凝をし、駆ける速度を上げる。

そして一番近くに居た男に向け、鋏を振り下ろすと……うげー、我ながらグロい。ピクピクしてる。

その光景を見せつけられた連中は、再び阿鼻叫喚。

蜘蛛の子を散らすように逃げるのだが、そうはいかんざき。

「んな!?! か、体が……しびれ……」

俺の近くに居た奴らには演説の間にしびれ薬をお見舞いしておいた。その数、百人位か? 風下の奴らは運がねーなー。

ま、風上の運よく逃げられた奴らは普通に追いかけて殺す。しびれてる奴らは後回しだ。

「おにごっこって奴か? いいぜ、遊んでやるよおおおおお!!!!」

出来るだけ威圧して、出来るだけ恐怖を与える。

死の恐怖。それを刷り込み、捻じ込む。ワハハ、逃げろ逃げろ。

そのトラウマは、お前らが殺してきた連中のトラウマだ。

……本当、胸糞悪い。

てめーらは一方的に奪うだけで、自分は殺されないとも思っているのか？

っーか何を一人にビビってんだか。どういう殺され方だろうと、盗賊に身を落としてる時点で誰かに殺される可能性はそこらにあふれてるだろうが。

俺が派手にやってるだけでビビりあがりやがって。

多分普通に斬るだけだったなら全員で一斉にかかってきてたんだろ
うな。

それがちよつと違ったやり方をするだけでこれだ。

つまんねーし、ムカつく。

死にたくないんだったら、殺されたくないんだったら最初からするなよ。

この世界の情勢を聞く限りじゃコソ泥に身を落とすという状況は考えられるだろうが、お前らのやってる事は結局お偉いさんの連中と変わんねー、ただの略奪だ。生きる為ではなく、快樂を求める為の。

まー確かに俺も正義の味方じゃない（こんな事してる時点でそれは明らかだけど）から、俺の知らないどっか遠くでの出来事だったら「へー、そりゃかわいそ」程度のモンだったろうけど、俺の目の前でそんな下らねえ事すんなど言いたいね。

詰まる所、俺が依頼を請け負う……と言うか依頼の押し売りをしたのは俺がムカつくからだってのを忘れないでほしい。勘違いすんじゃないぞ！お前らの為じゃないんだからな！

多分この光景を目の当たりにした街の連中は、「やりすぎだ」とか「かわいそう」とか思うんだろうな。

「それもまたいとかしってな」

別に感謝が欲しいわけでもないし。

俺は依頼通り復讐を果たすだけだ。

こんな俺を、果たしてあいつらは『天の御使い』なんて呼べるかな？ へっへっへ。

「んあ？」

すると、こちらを見る視線のようなものを感じる。

しかし敵意は見られないあたり敵ではないのだろう。

「……チョーの奴、やっぱ動いたか」

一応俺は引きとめたし、それでも行くってんだからしょうがないな、うん。

なら逃げた奴の捕獲は任せるとしようか。

・・・

私は今、とある崖の上からある戦いの一部始終を見ていた。

何とも凄惨な光景を前に、しばらく肉は食べたくないな、素直にそう思った。

だが同時に、やはり彼は強いとも思う。あのような地獄を、当たり前のように、作業のように生み出しているのだから。

今までの私ならばあのような人を人とも思わぬ殺し方を許さなかっただろう。

しかし、考えても見ろ。

槍で突こうが首を絞められようが、はたまた鋤で耕されようが、だ。

結局殺したという事実は変わらない。

私だってそうだ。

確かに無益な殺生はしないが、互いの誇りを賭け、武人としての決闘を何度もこなしてきたし、実際に人を殺したことだってある。

それと、今日の前で繰り広げられている虐殺に一体何の違いがあるのか。

残虐に殺すか、綺麗に殺すか。過程が違っただけで結果は同じ。

なんにせよこの街の住人は、迫りくる驚異を払って黄巾党の間を殺さねばならないのだから。

どちらにせよ結果が同じなら事のついでに復讐をしまえばいいじゃないか、と言うのが彼の言葉だ。

彼は本当に不思議だ。

私の価値観をことごとく覆して行っているというのに、私自身それをどこか心地よく思ってしまったている。

だからと言ってあのような行為をするのかと問われたらそんなこととするつもりは無いのだけれど。

さて、問題は彼から逃げてきている賊の事だ。

結果として彼らは罪を犯してしまっているのだから、キチンと捕えなければならぬ。

それに住民達が言うには一昨日街を襲った際に女達を攫っていったらしい。

……そう考えたらやっぱり彼の虐殺に関して何とも思わなくなってしまうな。

兎にも角にも、彼が待ち伏せていた地点だけはあらかじめ教えてもらっていたので、そこから黄巾党共が逃げるのに都合のいい場所を風と稟にわり出してもらい、町の住民を三つに分け私と風と稟がそれぞれ三つの簡易的な軍を率いて罾を仕掛ける。

私のところが一番戦力が集中しており、この崖の下を通って逃げる可能性が高いと風達は言っていた。故にこの場に黄巾党の連中が現れたのならこの崖から岩を落とし、行き止まりを作ったところで追いつめる、と言った作戦だ。はつきり言って簡単すぎる作戦なのだが気が動転しているであろう連中をその罾に嵌めるのは簡単だ、と風と稟は言っていた。

そしてもう一人、私の隣で強く双眸を見開いている、季衣と名乗った少女が肩を揺らす。

「……季衣、ひょっとして緊張してるのか？」

「そ、そんな事無いよ」

多分緊張しているんだろう。

彼を中心に展開している暴風のような戦いは、最早虐殺としか呼べないからあれを当たり前だと思わないでほしい。

その旨を伝えると、季衣は少しだけ安心したように微笑むのだが、私の考えは少し違っていたようだ。

「どういう方法で人を殺しても、結局同じだと思うの。そしてボクも、今から人を殺そうとしている……

やっぱり、どんなに悪い人が相手でもそれがちょっと怖いんだ」

改めて思う。

こんな子供まで、命の奪い合いをしようと言うのだからよもまつだ。否、世も末だ。

「今まで快樂で人を殺してきた連中だ。ここで捕えるか殺すかしなければ、再びこの街にやってきてしまうかもしれない」

彼は言っていた。この世は勝者と敗者だけだ、と。

「うん、わかってるよ。ボクも覚悟は出来た」

勝たなければ、負けるだけだ。

「……来たな」

だからここで、この街の住民達は『敗者』から『勝者』に成りあがるつもりなのだろう。

全員、覚悟は既に決まっているらしく、それぞれ手にした武器を強く握りしめていた。

「む」

一瞬だけだが、私は鋭い視線を感じ取った。
その方角は先程までアル殿が戦っていた地点がある。

「……流石ですな」

どうやらこちらに気づいたらしい。

その上で先程の視線以外何の反応も示さないあたり、こちらを止める気は無いのだろう。

「それなら、存分に暴れさせてもらおうか」

先日はアル殿に全部持っていかれたからな。
今からここは私の戦場だ。

・・・

「……何……これ……」

思わずポツリと呟いた。

いや、この光景が夢だと、そう思いたったのかもしれないわね。
隣の街からの救援要請。それを受けてここに急行した、それまでは良かった。

しかし、戦はすでに終わっていて……いや、始まっても居なかったのかもしれない。

そこには、血の海しか存在しなかったのだから。

私はなんとか耐えたが、周りの兵や苟？は近くの茂みに吐きに行
った。

一体何があったのか。いや、一体何が起きたのか。

それを尋ねなければならない。いや、確かめなければならない。

動転する頭を落ち着かせながら、私達は街に入った。

そこには。

「はいはい、押さない駆けない喋らない。おかしの法則はきっちり
守るよー」

真っ赤な服を着た男が怪我人の治療を施していた。

そして視界の端に捕えたのは縄に縛り付けられている黄巾党と思
われる一味。

女子供はあくせくと働いて炊き出しを作っており、男は街の復興
の為か力仕事に従事している。

何というか、はつきり言っていることなど欠片もないという状況
だった。

なににせよ、情報が欲しい。そんな訳でそれを得るべくまずは自
己紹介をしなくちゃね。

「作業中に失礼する！我が名は曹孟徳！陳留の勅使をさせてもらっ
ているわ！

救援の要請があったから兵を1000程連れてきた……のだけれ
ど、もう終わっているみたいだから街の復興の支援を致したい！

どなたか街の長となっている者は居ないかしら!？」

ここの県令は逃げ出したみたいだし、便宜上一番偉い人の一人や二人いるはず。

そう思ったのだけど、誰も名乗り出ないじゃないの。

……いや、街の住民は一斉に一人の男を見やるが、その男がかたくなに口を開かないのだ。

「……あの赤い男がそうである、ってことでいいかしら？」

その男以外が首を縦に振った。

・・・

なんで俺がお偉いさんの前に座らされてるのです？ 一体何が始まるのです？

ていうか服、服を着替えたいのですけど？ 真っ赤なパジャマ、血の匂いしかしねーんだこれが。

正直呪われてる気分になるから早く着替えたい。

とりあえず、当たり障りのない対応でさっさとお帰り願おうか。

ソーⅡモートク。どういった人間かは知らないが、天の御使いのネームバリューを利用しようと思えるのなら面倒だ。

この街の住民は俺の事を天の御使いだと思ってやがるし。

……十中八九チョーの奴がやったな……クソツタレエ……。

「で、あの血の海はあなた一人で生み出したというの？」

「えっと、はい」

「貴様あ！華琳さまに嘘を衝くんじゃない！！ありえないだろ、あんなの！！」

「春蘭、あなたは黙ってなさい」

「うう、華琳さまあ」

「……失礼したわ……方法はおいといて、あそこまでする理由があったの？」

ソー||モートク様が俺をにらみつけている。嘘は許さない、そう言った強い目だ。

成程、テイさんやギーさんが仕えるに値するか考える価値のある人間だな。俺はぼんやりと思う。

っとその前に、質問に答えなきゃな。

「そうですね、俺個人には無いです」

「ッ！！貴様、ならば何故あのような非人道的な行いをした！！」

「春蘭、あなたは今日の夜は一人で寝なさい」

「はうあ！？」

確かにあれは地獄だな、うん。

俺のやった事は非人道的だし、君は実に正しい。

うんうんと頷く俺を、けげんそうな表情で見るソー||モートク様。
一応お偉いさんなので様付けだぞソー||モートク様。

「じゃあ聞くけど、家族が殺されたら貴方達は殺した犯人を許すのですか？」

「……許せないわね」

「そう言う事です。この街の住民に地獄を見せた彼ら黄巾のクソ共に、同じく地獄を見せた。ただそれだけの事ですよ。」

それに殺したっても200人チョイってどこですか？奴らの1／10かそこらですし、まー生きてた連中は街の奴らが捕まえたみたいだし。

結局違ったのは盗賊共の殺され方だけで、結末としてはよくある光景でしょう？」

にっこりと、出来る限りの優しい笑みで俺は締めくくった。

「良いわね、気に入ったわ。」

「……あなた、うちに来ない？」

「「華琳様!」？」

えっ？

なんでなん？俺天の御使いとか言っていないよな？

はっきり言えばただの狂人だろ？そういう風に見てもらえるように振る舞ったじゃないか？

ほら、お付きの人も驚いてるよ？

「ええっと、ごめんなさい」

「貴様あー！！華琳様の御誘いを断るとは何事だあー！！？」

え？！お前吃驚してたじゃん！？てことは俺参入拒否派だろ！？
なんでキレてんの！？

そしてなんで斬りかかってくんの？！

「はああああ！！！！」

ガキン！っと金属がぶつかり合った音が響く。ベンちゃんは繊細だからな！？あんま無茶すんなよ！？

大体、はあああ！じゃないよ！！クッソなんつー馬鹿力だよ！！

座ってる相手に斬りかかるってお前何なの！？ベンちゃん壊れなようにそっちにも念集めにやらんし！！

かといって体勢悪過ぎて踏ん張りきかねーし！！椅子の足頑張れ！！折れたらヤバいから！！

「おいおいおいソー！！モートク様よお！！てめえ主なら飼い犬の躰位しっかりしろっての！！」

「きつ、きさまあゝ！！言うに事欠いて飼い犬だとー！！？」

「おーおーテメエ何ぞ犬で十分だ！！事あるごとにキャンキャン吠えやがって！！」

「な、なんだと貴様あー!!」

クッソこいつマジで力強いこいつ強い!!
念無しでこれってどういうことだよ!?

「ッ……オラァ!!」

とりあえず馬鹿力女を離れさせるために、座ったまま足に念を込め力が入らないながらもその足をふるう。

「グッ!!?」

念による防御も無い状態で念を受ければ当然簡単に吹き飛ばす。

体勢が悪かったため足に力は入らなかったが念のみでこれだから、やはり念という力は凄い。

出来るだけ隠しておきたいのに存分に使ってるってのはどういうことだろうか。

また襲われてはかなわないので立ちあがる。しかし、馬鹿女は倒れたまま反応を示さない。

……意識あるよね?

するとユラリと馬鹿は立ちあがって、辺りをきょろきょろと見回す。

「……なんだ、これ?」

?

馬鹿の発言に一同は、もちろん俺も首をかしげた。……と思った
ら、マジで？

そんな周囲の目を気にすることなく、全身からオーラを滾らせて
いる。

おいおいおい！目覚めちまったんかよ！？クッソ今までもなるだ
け開かないように意識して攻撃してたのに、こいつやっぱ強いわ！！
しかしこのままでは生命エネルギーが枯渇して死ぬだろう。

「おい馬鹿！そのままじゃテメエ死ぬぞ！？」

「なに！？」

「ああもう、こんなことするのは特別だからな！！
いいか、テメエの体からなんか溢れてるのを感じるだろ！？」

周囲の何言ってるのこいつみたいな目を完全に無視しながら俺は
言葉を続ける。

「その溢れてる何かを体の周辺に留め、力を凝縮させるように想像
しろ！！！」

「むむ……こうか？」

おお、やっぱりこいつ才能あるな。すぐに纏のコツをつかみやがっ
た。

まあ別に育てたいとは思わないが、人材マニアなら泣いて喜ぶ価
値のある存在だわ。

「よし、それでいい。その状態を纏つつつてな。念の基礎となる

状態とでもいえば良いのか……
普段より体の調子が良い感じしないか？」

「む、そう言われれば、体が軽い気は……するな」

「それは『念』つってな、お前の体に隠されてた力みたいなもんだ。
だからさっきみたいに垂れ流ししてたらいずれ死んでたぞ。

まあ今回は無理矢理俺が起こしちゃったからその責任みたいなのはとらせてもらったが……。

その力を応用すれば素手で岩は碎けるし、紙で剣を斬ることだって出来る」

「「!？」」

おー、驚いてる驚いてる。まあ、他の奴には見えないのに、突然そんな事言われたら驚くわな。

まあそんな事が出来るようになるのはきっちり修行つまにやらんし、今すぐについてわけにもいかんしな。

そして馬鹿は目をキラキラさせながら、全身から湧き出ている念に感動している。

「まあ、俺はお前の力を伸ばしてやる気は無いけど」

「何だと?! 何故だ!？」

いや、何故ってそんなもんめんどくさいじゃないか……。

「さっきも言ったとおり、俺のせいで死んじゃうかもしれないから、軽く制御法を教えてやっただけだ。」

その力をこれからどう使い、どう伸ばすのかはお前次第だ。せいぜい無い頭使って考えるんだな」

じゃーな、と俺は手を振って去っていく。完璧な流れだ、引きとめる空気じゃない。

「待ちなさい」

ほらー、なんで止めるのよー？

いやさ、薄々感じてたんだ。「あ、これ絶対追及されるパターンだわ」って。

なんて言って誤魔化そうかな。俺はなんでも屋さんなので誰にも仕える気は無い、とか言ったらそのまま雇われそうだ。

いや、待てよ……？

「さっき春蘭から感じた気のような力、何？」

ん？ソーさんも念の素養がありそうなのか、流石だなー。
チョーの奴も鍛えたら念すぐ覚えそうだし……。

「我々の業界では念と呼んでいます」

素直に教えてみることにした。

・・・

「我々の業界では念と呼んでいます」

ほほー、あれは気ではなく念と言うのか……ん？

と言う事は、夏侯惇殿は私があれほど望んでいた念の基礎をあっさり覚えてしまったということか？

……ズルい。ズルいぞ夏侯惇殿。

私がどれだけそれを教わる事を望んでいたと思っているのだ！ズルい！

「念、ね……気とは違うものなのかしら」

「んー……念とは元々誰しもに宿っている生命の源とでも言えば良いんかね、その存在に気づくか気付かないかの違いに過ぎない。気、つてのがどんなもんか知らんけど名前が違っただけでひよっとしたら同じ概念なのかもしれんけど」

成程、天の国とこちらでは随分と文化が違っていた。

ならば同じ物でも名前が違う、と言う事もありえるだろう。

とはいえ、呼び名などどうでもいい。私も教わりたい、ズルい。

「……それで、うちの春蘭にその力を勝手に与えておいて制御法をもっとちゃんと教えないのはどういう事なのかしら？」

「あん？そっちが斬りかかってきたから対応したら目覚めちゃっただけじゃん？斬りかかってこなかったら何の問題も無かったっての」

最早先程までの丁寧な対応を取る気は無いのだろう（飼犬とか言っちゃったし）。

いつも通りの気だるげな感じで会話を続けるアル殿。ズルい。

「それに関しては謝罪させてもらうわ、本当に貴方があの惨状を造

り上げたのか知りたかったの。ごめんなさい」

おお、素直に頭下げるとは流石ですな。夏侯惇殿も主に頭を下げさせる結果となりシュンとしている。

……本当に犬みたいだ、と失礼ながら思ってしまった。そんな事はどうだっていい。私も念を教わりたい。ズルい。

さっきからずっとズルいズルいと視線を飛ばしているのだが、アル殿は気付いているだろうか？ズルい。

「ええと、俺も思わず念を使っちゃったし、まあおあいこさんってことで」

アル殿も一言謝罪があればよかったのだろう。それ以上追及する事は無かったのだが。

「それで、あなたは私のところに来てくれないのかしら？」

「……まあ、今は仕事中ですからね。依頼人の依頼を果たさないまま別のだれかと契約するのはなんでも屋さんの沽券にかかわる」

……さっきは普通に二重契約してたと言うのに、こういう場では断る理由に使っている。ズルい。

とはいえ、その事を口にすれば私自身面倒な事になりそうなので何も言わない。

「……なんでも屋さん？」

「そうです。此度の戦もなんでも屋さんとして復讐代行させてもらいました。報酬はみんなの笑顔、なんてな」

アル殿はなんでも屋さんを名乗る際、いちいち妙な言い回しをしないと気が済まないのだろうか。

「……つまり、私達よりも先に別の依頼が入っているから、今は私の下にはこれない？」

「そうですね。今は天の御使いとやらを探しております」

……アル殿も天の御使いじゃないか。

と、突っ込みを入れたらやっぱり面倒な事になりそうだ。

すると次の瞬間、とんでもない言葉を2人から聞いてしまった。

「なるほどね。私も天の御使いには興味があるし、その人物を探すのに全面協力するからその代わり春蘭に念の扱い方を教えてくれな
いかしら？」

「その言葉を待っていた」

何……だと……？

a c t 3. 一寸先は紅（後書き）

妄想は妄想のまま終わらせるべきだった、そうは思わないかね

act 4. まずは拠点を決めましょう

やってきましたよ陳留！

いやあ流石ソーさんの治める土地ですな。パツと見平和そんな感じじゃあないか！

へっへっへ、これが『なんでも屋さん陳留支店』の第一歩だ！

あん？他の連中はどうしたって？

フーさんとリンさんはそのままソーさんの下に身を置く事を決めたらしい。

うん、あれは確かに英傑足り得る強い何かを感じたし。

あ、その際真名をもらいましたので呼び名もチェンジしました。

まあ、真名でもなんでもどちらでもいいんだけどね、呼ぶなら真名の方が良いと言われたのでそう呼ぶ事にしたんよ。

あいつらとはたまに街中で会うとお茶飲みながら愚痴を語らう程度には仲良くなった。

なんか、前に雇用主とは云々とか言ってたけど気のせいだったぜ！まあ、既に雇用関係は解除されてるしな。普通にこっちの世界の友人として付き合っていくことになりそうだ。

それはさておき、俺はどうしたって？

俺は軍門に下る気は無い！！

何せ軍を率いた経験なんぞ無いし……仕事じゃ基本ボツチだったし……。

かといって一兵卒として参加しても集団行動出来る自信ないし…

戦に参加しろとか言われても適当に暴れまわるしか能が無いし…

後はトンちゃん（かこうとん、なぜか変換できないの略称）の念についてだけど、一応ちゃんと指南はするつもりだ。

チヨーとの契約を果たすために天の御使いを見つけるのを手伝ってもらおう事になったしな。

『天の御使いを探している』と言えば俺自身天の御使いだとは思われにくいだろう。

とはいえ念と言う考えが無いからか、ソーさんに「お前も天の御使いじゃね？」って疑われてるから何とか誤魔化さなければならない……。

クソ、チヨーの奴が全部悪い！俺は悪くない！

まあ、念と言う考えは無くても似たようなもんで気ってのがあるから（多分違うのは名前だけだと勝手に思ってる）、土地の違いによる名前の違いだって説明したら渋々ながら納得してもらった。

とにかく、俺は今陳留の街の中に居る。

事務所を構えるにも場所やら金やら必要だし、それまでの仮住まいを探す必要がある。

故にしばらくはソーさんからの依頼で賊狩りに精を出すと思う。

さてさて、方針は固まってるし、後は行動に移すだけなのだが…

「チョーよ、お前はソーさんのどこにいかねーのか？」

「何を言うか、アル殿。夏侯惇殿に念を教えて私には教えないのはズルいです」

「えー、だってあいつは纏のコツ掴んでるけど、お前は一からしな
いといけねーじゃん」

めんどっちいよ、そんなの。

「じゃあ夏侯惇殿の時みたいに念とやらで一発ブワツとやってしま
えば良いではないか！よいではないか！」

どこの悪代官だ！大体あれは外法だと何度説明したら……！

「じゃあゆっくりでも良いから教えろ下さい！」

「だーからそれが面倒だっつってんだろ……！」

こういうのはバツサリ言っとかないと後々面倒な事になるのは目
に見える。

「……」

頬を膨らませても駄目。

「……」

裾を掴んでも駄目！

「……」

上目づかいしても駄目っ！

「……私とは遊びだったんだな」

え？

「あれだけ弄んでおいて、面倒な事になる前にポイツて事だな！？」

「はい！？」

ちよちよちよ、ちよーっと待とうか？

ここどこだと思ってるの？

街中だよ！？街の住民が一斉にこっち見てるよ！？

なんかざわざわしてるよ！？

やだ……痴話げんかかしら？

やあねー、これだから男って……。

竹籠ー竹籠は要らんかー？

リア充死ね、死に腐れ。

あんなのが華琳様の近くに居たなんて！ああ、なんて汚らしい！

止めて止めて！こっち見ないで！ああ、なんでも屋さん開く前に

なんてこつたい！！第一印象最悪じゃねえか！

「あの……チヨーさん？ いや、チヨー様？ いやさ、チヨー大明神様？」

「……星だ」

「へ？」

セーっていうと真名ですか？ フーさんやリンさんが渡した時、なんか不敵な笑みを浮かべながらも渡さなかったチヨー様の真名ですか？ いやいやいやそんな恐れ多い！ 私のような低俗な者が貴方様のような高貴な方から真名など……！

「私の真名だ……受け取ってくれるか……？」

あ、あの……。

最低ね、男って。責任もとれないんだから！ 死ね！ つま先から徐々に腐って行って死ね！

嗚呼汚らしいこの全身精液男！ 全ての女性に土下座しながら死ね！

死刑なんて軽い刑は駄目ね、私は変態ですので死にますって懺悔しながら市中引き回しの刑にあって死ね！

あーやだ、私にもっと表現力があれば言葉だけであの腐れ男を死なす事が出来たのに！！ 死ね！

私に罵倒する時間を取らせた罰として死になさいよ、死ね！

ちよいちよいちよい！ 誰だよさっきからのっそい罵倒してるの！ 俺のガラスのハートはもう砕け散ってるのにその砕けた欠片を入

念にすりつぶさないで!!

「謹んで受け取らせていただきます……セー。いや、セーさん。いやさ、セー様」

「念……教えてくれるな……?」

「イエス ユア ハイネス……」

「それじゃあ、行こうか……」

「イエス ユア マジエスティ……」

えんだあああああああ! いやあああああああ!

周囲から歓声のようなものが響き渡る。なんでこいつらこんなにチームワーク良いんだ? 流石ソーさんとも言え良いのかコラ!

チョー……いや、セーの奴が俺の首根っこを掴みながら、周りに手を振り感謝を示している。何だこいつら、グルか? (疑惑)

嗚呼、最悪の陳留生活初日だ……。

・・・

くふっ。くふふふ……。

おっと、思わず笑みが漏れてしまった。しかし、頬の緩みはどうしようもない。

形はどうあれ、アル殿からの言質は得た。後は念についてじっく

り教わるだけだ。

ん？曹操殿の下にはいかないのかって？

そうだな……確かに彼女からも英傑としての素質を感じられた。
しかし、しかしだな……どうにもあの百合百合しい雰囲気はちよ
つと……。

そういうわけで丁重にお断りさせていただいた。あちらも風や稟
が陣営に加わったことで十二分に満足しているらしく、すぐに諦め
てくれたが……。

「あの目は多分やっぱり諦めてない気がする」

「あ？どーした？ちょ……セーさんや」

「嫌ですなあ、アル殿。私達の『仲』じゃないか、星と呼び捨てで
呼んでいただきたい」

「はいはいセーセー」

「はいは一回だ、セーも一回」

「セーハイ戦争」

「条件は満たしているがなんだか危ない感じがするから駄目だ」

「セー」

「よし」

すると周りでそれを聞いていた街の住民達が冷やかしてくる。

ここは随分と雰囲気の良い街だ。流石曹操殿、治安維持にも努めているということだろうか。

と言うよりは、先の騒動で悪目立ちしすぎたのか。アル殿も恨めしそうな目で見ているし、これからは自重しよう。

「ところで、これからどうするんだ？」

「んあー？とりあえず、仮住まいを探す。

そして店舗を構えるのにふさわしい場所を明日から探す」

アル殿は本気でどこかの軍に所属する気は無いらしい……。天の御使いだと言うのに、本気で嫌がっているようだ。

この分だともう片方の天の御使いもあまり期待しない方が良くだろう。と言うより、自分達の国の問題は自分達で解決すべきだ。

一人の人間に頼るなど、あまりに他力本願すぎはしないか？まあ、それほどまでに漢王朝は腐敗したという事か……不敬になるので口には出さないが。

すると、アル殿は何か思いついたように口を開いた。

「そーだ、セー！念教えてやるけどその間はなんでも屋さん陳留支店の事務員になってもらうからな！」

「じむいん？」

「まあ、要は受付役だな。つっても最初はお客さんも来ないだろうから陳留に溶け込む事に集中することになるから、それまではセーも念の方に集中してもらおう」

「! 本当か?! 念を教えてもらえるならなんでもするぞ!」

「ふふん、既になんでも屋さんとしての自覚があるのか。こいつは良い拾いモンをしたぜ!」

何だかよくわからないが、こちらとしても念を教えてもらうに当たってやる気を出してくれるのは非常にありがたい。

何せ本来はものっそい嫌がっていたのだから。

『きゃー!!!』

すると、どこからか悲鳴が聞こえた。

それと同時にその声の聞こえた方向にアル殿は駆け出した。

「アル殿ー!?!」

「なんでも屋さんを宣伝するには、目立つところするのが良いんだよ!」

建物を一足飛びに越えていくものだから追いつけなさそうだ。

……念ってズルい。

ともかく、アル殿に追い付かねば。

細い路地を抜け、私も声の聞こえる方向まで向かうのだった。

・・・

「その人を放せ!!」

「バーロー離した途端に殺されるだろうが!! 良いから金と馬をY
OKOSE!!」

えっとー、夏侯淵さんだっけ？
とりあえず何があったのか知らねばな!

「夏侯淵さーん」

「ん? お前は……」

警戒されてる。いや、まああんな惨状を三乗したような光景を造り出した張本人を信用しろなんて無理な話だけどさ。
更に言えば姉のトンちゃんのを念を指南するにあたって姉に手を出さないか警戒されているようだ。

それに関してはこれからの態度で信用してもらえないかな。
ほら、あの子アホの子だしそんなに興味は無いけど、それ言ったら怒られそうだな……。

「……クソ共の残党か」

うざいな。まっことうざい。

でもまあ、我が社の宣伝のための材料にはもってこい、か。

「この場は俺に任せちゃもらえねえか?」

「何?」

「狩り残しが原因だからな。きっちり最後まで責任持って狩ってやるよ」

「おい待……！」

はっ、さっくり潰すか。こういうのは慣れてるしな。
夏侯淵さんの制止を無視して賊の前に立ちはだかる。

「あぁん？何だテメエ！？」

「あ、ボクここ最近ここいらに引越してきました、これから新しいお店開こうと思ってるんでヨロシクね」

「はぁ？この人質が見えねえのか！？」

短刀を住民Bさん（仮称）に突き付ける。その手を放せと言いたいが、賊最後の華だ。好きにさせよう。

「ひい?!」

落ち着くんだ、人質のおねーちゃん。もう大丈夫だからな。しかしおねーちゃんはそんな目配りに全く気付かない。

ならば言葉にするしかないではないか。まずは頭に血が上ってる賊を落ち着かせよう。

「まーまー、落ち着けて。ほら、おねーさんもダイジョーブだから。
時間つぶしに雑談でもしようや。そうやってわめいたって状況は

かわんねーぞ？」

両手を上げ戦意が無いのをアピールする。

とはいえそれを簡単に信じてもらえとは思っていない。

その為の念能力なんだがな。

……やっぱ、なるべく念能力は広めたくないな。こういうところのアドバンテージを失う恐れがある。

——『ボイズンメディスン押し売り毒林檎』。

毒林檎、なんて物騒なネーミングしてるけど、一応『メディスン』部分もあるんでな。

鎮静作用のある薬を散布するなんてお茶の子さいさいさー。

こないだの街での治療もこれを使っただけで感じ。なんでも屋さんは何でもできるのだ。

……眠らせても良いんだが、周りも眠ったら『なんでも屋さん』をアピールできないしな。

しかも相手を特定して薬を散布する事はできねーからな。操作系は苦手だ。

そんな訳で一番危険のないアロマセラピー的なあれだ。

「……話くらいは、聞いてやらねえこともねえぞ」

男のツンデレ？止めてよね。一応効果は出てるみたいだし、後はセーが来たら……。

おっと、セーがようやく来たか。しかもちょうど良い事に賊の背後から。

後は俺に賊の目を釘付けにさせるだけでいい。俺はセーに向かってアイコンタクトを送った。

セーも気づいたらしく、軽くうなずいてくれたのでこの事件は解

決したも同然だな。

「まあ、話なんて無いんですけどねー」

元々あまり高い効果に設定していなかったので鎮静効果もすぐに切れたらしく、ちょっとふざけてみたらすぐに切れた。

周りに目が行っていないように、短刀をこちらに向けて切れてる。うわすんごい切れてる。これでもかってくらい切れてる。

「ああ?! テメエ舐めてんのか?!」

……舐めてんのはテメエだろ、人様にメーワクばっかかけやがってまあその御蔭でこうして宣伝できるわけだけだな。不快だ、とつとと終わらせようか。

「クッククク、馬鹿め! 上からくるぞ、気をつけろ!!」

「何!?!」

賊が上を向いた瞬間、念の為短刀を奪うべく俺も急襲する。

セーは既に賊の背後にいるから安心だ。そして俺はドヤ顔で勝利宣言をした。

「と言うのは嘘だ!!」

「グハァ!!?!」

ずっとこける賊によろける人質。人質はセーが保護しているので俺は短刀を拾い上げこれ以上の抵抗を不可能にしたのだが、セーによる当て身を受けた賊はあっさり気絶した。

……よくやったぞ、セーよ。俺はぼ何にもしてないけど、よくやったぞセー。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

セーが人質の住民Bを保護する。

ふ、俺の巧みな話術で賊を翻弄してやった。
しかし周りはセーばかりちやほやしてる。

……良いもん、俺は縁の下の力持ちだから。

隅っこの方でうじうじしてたら住民の輪の中心からセーの声が聞こえてきた。

「えー私達2人はこの街で『なんでも屋さん』なる便利屋をやるう
と思ってる！」

飼い猫探しから浮気調査、要人暗殺まで頼めばなんでもこなして
見せよう！

まだ店舗は出来てないが、出来たら改めて宣伝させてもらうので
その際はよろしく頼む！」

！？

すごいぞ、セー！これなら繁盛間違いなしだ！グッジョブセー！

そしてその時、俺は見た。

セーのウインクを。

「……！」

その時、俺の脳裏にセーの声が響き渡った。

（アル殿、私達はこれから仕事を共にする仲ではありませんか。
アル殿の手柄は私の手柄。私の手柄はアル殿の手柄。
これは、2人の協力による勝利ですな）

俺は今まで、お前の事を誤解していた……！
ありがとう……ありがとう……！

ごめんな、今まで邪険に扱ったりして……！実は前から念の事教えてほしそうな知ってたんだ。

でもさ、めんどくさくてさ、ずっと無視してたんだ。

だけど、今回の件で俺はお前のやる気を垣間見た……！

良いぜ、お前のやる気が本気なのなら、まずは念をきっちり教えてやる……！

俺とおまえは師弟であり、仲間だ……！

……へへ、仲間だなんて気恥ずかしいけどよ、こういうのも悪くないな！

俺は何も言わず、サムズアップする。

しかし俺は気付かなかったんだ。

セーがしてやったりとあくどい笑みを浮かべていた事を。

・・・

追いついたと思ったら、人質と思われる女性と黄巾の残党。そしてそれに立ちふさがるアル殿。

成程、状況はわかった。そしてアル殿の目配り。

後ろからやれと言う事だな？不意打ちとは不本意だが、人質の女性をより早く救うにはそれがよさそうだ。

「クックク、馬鹿め！上からくるぞ、気をつけろ！！」

「何！？」

好機！

賊はアル殿に集中している為か、後ろにまで気は行っていない。足に力を込め、一気に賊の背後まで行く。アル殿も不意を突いてきたが、私だけでも形はつくだろう。

「グハァ！？」

よし。後は人質を保護して終わりだ。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

瞬間、周りから歓声が響き渡った。

はっはっは、私とて派手なのは嫌いじゃない。

周囲の歓声に答え、手を振るとそれに合わせるように盛り上がる。

視界の隅ではアル殿がうじうじしていた。

多分、活躍をすべて奪われたことに起因すると思われる。

仕方ない、あのままと言うのも少し可愛そうなのでここは一つ、宣伝でもしてやるか。

「えー私達2人はこの街で『なんでも屋さん』なる便利屋をやるう
と思ってる！」

飼い猫探しから浮気調査、要人暗殺まで頼めばなんでもこなして
見せよう！

まだ店舗は出来てないが、出来たら改めて宣伝させてもらうので
その際はよろしく頼む！」

その言葉に周囲は更に沸く。うむ、反響も中々。

確かにアル殿の言うとおり、目立つ場での宣伝は有効だな。

そしてアル殿の方を向くと、何やら感涙した様子だ。

……皆まで言うな。私とアル殿の間ではないか。きっちり念を教
えてもらおう。

（念のこと、よろしく頼むぞ）

はつきり言って念を教わるにあたって脅しまがいの事をしたから
な。適当な事を教わってはかなわん。

その気持ちを簡単に表わしてみたが、効果抜群のようだ。

アル殿は笑顔をこちらに向け、親指を立てている。

……くふふ。アル殿の信頼は勝ち得たのも同然だな。

おっと、このあくどい笑みをアル殿には見られてないだろうか。
……多分大丈夫だろう、何だかそんな気がする。アル殿ってほら、
残念だから。

a c t 4. まずは拠点を決めましょう（後書き）

俺は本当に何がしたいのか分からないっ！

act 5. 黄巾ハンター爆誕（前書き）

更新遅いとか言って毎日投稿している。

違うんだ、もうひとつの方がメインなんだ、でも展開が思いつかないんだ。したらこっちに手が行ってるんだ。

act 5. 黄巾ハンター爆誕

さて、本日はあるお願い事をするために陳留で一番偉い人のところに来ている。

実はトンちゃんとセーの念の修行を初めて1週間程経過している。セーの奴には念を肌で感じさせるためにずっと瞑想させているので、実際に指導するのはトンちゃんだけだ。

今日ここに来たのはそれに関する説明も兼ねている。まああくまでも事のついでだが。

「なんでも屋さん開くのにお金要るから仕事くれ。黄巾賊とか狩ってくるよ!」

扉を開いた後の開口一番がこれだ。ちょっとしたドッキリだけど吃驚してくれたかな?と思ったら呆れた顔をしている。

「……一応、ここまで来るのに警備の者がいたと思うんだけど」

まあ確かに、隠密行動とまでは行かないけど絶をしたら大抵の間からは気付かれないからな。

でも気付かなかったじゃ済まされないからな、ここはびしっと言ってやっという方が良いな!

「成程な、次からはもう少し警備を厳しくしたら良いと思う」

「……御忠告、痛み入るわ」

「どういたしまして」

さて、俺は今ソーさん（曹操）の執務室に居る。

と言っても自分ソーさんの部下じゃないんで不法侵入だけど。

とりあえず昨日今日で仮宿を入手することができたからしばらくはそこを拠点に金を貯めなければならぬ。

しかし、しごとがなかった！

仕方ないのでこうしてソーさんの下を尋ねた、と言うわけだ。

今の世の中は荒れに荒れているため、賊を狩ってくれる存在は貴重だそう。

兵の損失もないし、仮に返り討ちに遭ったとしても困るのはそいつだけなのだから。

まあ、仕事に関してもそうだがあともう一個、トンちゃんの念について。

トンちゃんは理屈よりイメージで伸ばすタイプなので1週間かけたと言うのにいくら言葉で説明しても理解してくれない。

こないだ纏のコツをいち早く掴んだのは最早奇跡と言っても良いくらいだ。

だがしかし、理屈無くしてイメージは出来ぬ。

俺として自分の能力を造るためにありとあらゆる薬やら毒やらを調べたり実際に食べてみたりと割と命がけだったのだから。

「そういうわけで、トンちゃんには気に関する本を読ませてやってはくれないか？」

「一体どういうわけなのよ」

「前にも言ったけど、念と気は名前が違っただけでやってる事は同じだからな。」

ただ、俺の住んでたとこの方が先に進んでると言うか、気の上位互換が念だと思ってくれたらいいさ。

つまり、気を覚えると言う事は念の基礎を得るのに等しい。つまり気について勉強すりゃちっとはマシになるはずだ」

トンちゃんは潜在オーラはずば抜けて高そうだし、案の定強化系だから鍛えたら相当な使い手になるはずなのだが、練のコントロールに手間取っている。

恐らく、先に言った通り、イメージだけで事を運ぼうとするからうまく行かないのだろう。

これを機に勉強好きになってもらったらソーさんも助かるはずだ、多分。

「なるほどね。まあ分かったわ。私から言えば嫌々ながらに勉強してくれと思うし。」

賊狩りについてもそこそこの名の知れた黄巾賊の風貌と名前を記した名簿がここにあるから」

「あるから？」

「……好きなだけ狩ってきなさい」

「らじゃー」

へっへっへ。ソーさんすげー悪どい笑顔してるぞ？

政務に追われて黄巾の連中をつぶしに行けないのがそんなに不満

か！

ならその分きっちりガッツリ狩ってこないとな。

俺はソーさんから名簿を受け取ると、他の奴らに見つからないように帰ろうとしたんだけど……。

「華琳さmゲエッ！！全身精液男！！」

「ゲエッ！荀？！？」

また嫌な奴に出くわしたもんだ！こいつすげー男嫌いらしくてこないだのセーの奴が外で俺を貶めた時に外野ですげえ罵倒してきたのこいつみたいでさ、俺こいつ苦手なのよね。

あっちも毛嫌いしてるみたいだし、絡まれる前に退散するか……。

「汚らわしい男が汚らわしい口で私の名前を呼ばないで汚らわしい！それに神聖なる華琳様の執務室に土足で踏み入るとはあんた何様のつもり！？ああ汚らわしい！その汚らわしさは罪だわ！死罪にすべきよ！そして華琳様の執務室に入れた事に感謝しながら死になさいよこのド変態！！」

「うう……」

泣けてきた。

「何泣いてんのよこの変態！！」

最早言い返す元氣も勇氣も無い。

「うう……生きててすみませんでした……可及的速やかに死にます

……」

「変態にしては良い心がけね！その心がけに免じて許してあげない事も無いわ！二度と来るんじゃないわよ！！」

「はい……ありがとうございます……ありがとうございます……」

俺はトボトボとソーさんの執務室を後にする。この怒りは全部黄巾賊の連中にぶつけよう。

完全な八つ当たりだが、世のため人のためになる八つ当たりなので許してほしい。

アルが私の執務室から出ていき、一気に静かになる。

目の前の桂花は一仕事終えたような達成感に満ち溢れていた。

「華琳様、あの変態に何かされませんでしたか！？」

「桂花……」

「はい！」

「貴方しばらく一人で寝なさい」

「!?!」

流石にあれば可哀そうだ、私は本気でアルを憐れむのであった。

・・・

俺はセーの待つ仮宿へと戻ってきた。

こないだの黄巾賊残党事件（仮称）で一躍時の人と化したセーが仮宿を探していると言えはホイホイと見つかったのでそこを拠点にさせてもらっている。

とはいえいつまでも居るわけにはいかないのでさっさと金を貯めて、買うまではいかなくとも誰かから土地を借りたいと思う。ていうかこの時代って土地の売り買いって出来るのか？

「セー！かえったぞー！」

「……」

む、瞑想中だったか。感心感心。

トンちゃんの事故とは違ってセーの奴にはしっかりと一から念を教えることにしている。

その為の第一歩がこの瞑想だ。心を静め、自身の体から感じるオーラの存在を認知し、少しずつ精孔を開いていく。

こればかりはどんなに天に愛された才を持つ者であっても時間がかかるだろう。

あっちの世界じゃ出鱈目な奴ばっかだったからこの方法でも1週間もかからずして纏をマスター出来る奴とかいるみたいだし。

ちなみに俺は2カ月かかった。とりあえずそれを目途にセーの奴には修行に励んでもらいたい。

するとようやく俺の存在に気付いたのか、薄く眼を開くと瞑想を終えるセーだった。

「む、帰ってきたか。それならそうと言ってくれればいいのに」

「よし、良い集中具合だ。何か感じるモノはあったか？」

「何か暖かいような、それでいて力強い何かが体から少しずつ流れている、そんな感じだろうか？」

……まだ修行始めて1週間位なのに。

この分だと一月あればオーラを掴めるところまではいけそうだな……。

「チッ……まあ頑張れよ」

「舌打ち!?!」

「お前の才能に嫉妬なんてしてねーからな（なんでもない、気にするな）」

「本音が丸見えだぞ、アル殿。アル殿に才能を認めてもらえるのは悪い気はしないが」

「む、しまった……まあそんなこたあどうだっていい。ちょっと賊狩りに行くけどお前どうする？」

健全な精神は健全な肉体に宿るってなあよく言ったもんでな、瞑想ばっかしてっと体鈍るだろ」

まあ、多分聞くまでもない気がするけど。

「もちろん行くに決まっておるだろう」

「その言葉が聞きたかった」

善は急げってな。

とりあえず周辺の村とか巡って賊の情報を集めるとしようか。

俺自身には特に準備する物も無いのでベンちゃんとワルちゃんを腰に差すだけでいつでも行ける。

後はセーの奴が着替えるだけなので俺は外で待つとしよう。

「じゃ、外で待ってるからさっさと着換えろよ」

「うむ」

1階の女将に挨拶と軽い世間話をした後、外に出る。

するとそこにはキーちゃんが居た。あ、キーちゃんってのはこないだ街に侵攻してきた賊を殲滅した時にその街に住んでた許？ちゃんです。

何を思ったのか彼女もソーさんの下に身を寄せその武勇をふるうと言うので個人的には吃驚した。

つつても吃驚しただけでキーちゃんが自分で決めた事に口を出す気は無いので何も言わなかったが。

「おいキーちゃん」

「あ、おにーちゃん！」

キーちゃんもこちらの事を認識したらしく手を振りながら駆け寄

つてくる。可愛い。
手に持っている荷物を見る限りでは生活用品を集めているようだった。

「こんなにちいさいのに立派だねえ……」

「？」

とりあえず俺はキーちゃんの頭を撫でることにした。
突然の事にキーちゃんはきょとんとしているが満更でもない様子だと勝手に思ってる。

「あ、そーだ俺今からちよつとそらの村とか街とか巡ってくるからキーちゃんの街にも行くけど街の人になんか伝えたい事とかある？」

つってもキーちゃんがこっちに来てまだ1週間ちよつとだけど。
近くの山越えたらすぐに街があるからキーちゃんも帰ろう思ったらずぐ帰れるけど。

まあキーちゃんは俺と違ってちゃんとした仕事があるから……つてこれ言って悲しくなるな。

何にせよキーちゃんはホイホイと陳留を離れられる立場ではないのでメッセンジャーの代わり位は請け負ってやろうじゃないか。

「良いの？ ありがとうおにーちゃん！ それじゃあ……流琉に伝言をお願いしてもいい？」

「ふむ、その子の事は街の奴らに聞けば誰かわかるか？」

「大丈夫だよ！ こないだは料理の材料を買いに行ってたみたいだか

ら居なかったけど、何も言わずに私出てったから……
手紙書こうと思ったけど、おにーちゃんが伝言に行ってくれるなら安心だね！」

なるほどね。キーちゃんのお友達ね。その伝言、このなんでも屋さんが請け負った！
でもな。

「手紙も書いてやった方が良くないんじゃないか？
直接行けなくても、自分の言葉は人づてより自分で伝える方が良いと思うぞ？」

まあ今回は伝言の方が早そうだからこの後行ってくるけど」

「……うん！」

うむ、良い返事だ。

すると俺の後ろにある宿の戸からセーが出てきた。

「む？季衣ではないか、どうしたんだこんなところで」

「あ、おねーちゃん！こっちに来て落ち着いてきたから要る物買い集めてるところなんだ！」

「ほう、立派じゃないか！偉いぞー。それに比べてうちのアル殿ときたら毎日働きもせずふらふらふら……」

よし、丁度良いしここいらでお別れだな。

後セー、お前適当な事言ったら張り倒すぞ！

「それじゃ、生活用品の買いだし手伝ってあげたいけどこれからお

仕事だからな。

次会ったときにルルとやらからの伝言を伝えるからな」

「うん、ありがとね！それじゃあバイバイ！おにーちゃん、おねーちゃん！」

そして駆けていくキーちゃん。うん、子供は風の子元気の子。

「それじゃ、俺達も行くか。狩り^{ハント}の開始だ」

俺はブラックリストハンターじゃないけど、今やってる事はまさにそれにあたるだろう。

事のついでに天の御使いの噂も探っておこう。今のセーを見る限りじゃ天の御使いはいつでもよさそうにしかみえないが、一応だ。そういう契約だし。

・・・

失意のどん底に落ちたらしい桂花がふらふらとしながら執務室を出て行った。

……何しに来たのかしら、あの子？

すると桂花は再びふらふらとしながら執務室に入ってきた。

ああ、やっぱり何か報告があるみたいね。

「華琳様……グスッ……報告がヒグッ、ございまズズッ……」

どんだけ悲しかったのよ、この子。

はぁ……仕方ないわね。

「こっちに来なさい、桂花」

「え？でも……」

「私の言う事が聞けないの？」

強い語意に対して優しい笑み。ふふ、これに落ちない女子はいない！なんてね。

「うう……華琳さまあゝ」

やっぱりこの子可愛いわね。

猫のように胸元に擦り寄ってくる桂花を撫でながら報告を聞く事にする。

「それで、報告って？」

公私はきっちり分けるべきと考えているからか、名残惜しそうに私の胸元から離れた桂花は軽く咳払いをしながら報告した。

「あ、はい……『天の御使い』に関する情報です」

「へえ……何かあったの？」

天の御使い。アル・プライドと言う一風変わった名前の持ち主にして『念』と言う技を使用する謎の人物。

私はあれが天の御使いじゃないかと睨んでるんだけど、本人がかたくなに否定している。まあ私も貴方が天の御使いですなんて言われたら絶対嫌だけどね。

何せ『天の』という時点で漢王朝の皇帝と真っ向から対立してい

る。とはいえ今の王朝は凋落しつつある。

そう考えると天下統一への足がかりとしては便利な名前よね。

まあ、それを利用する気が無い、と言う事はアルはそういった権力には興味が無いと言う事でしょうね。

だからこそ私も深く追求することなくアルをこの陳留の街に入れたのだけど。

「なんでも、『天の御使い』が率いる義勇軍が黄巾賊2000を撃破したと」

——来たな。

私はまず初めにそう思った。

アルは多分あのまま捨て置いても問題無いと思う。

しかし、もう1人の『天の御使い』はそうではないらしい。

軍を率いたと言う事は、大なり小なりこの国に食い込んでくる覚悟はあるみたいね。

ふふ、私の敵になりうる存在か否か……その天の御使いが本物だと言うのなら相見えることもあるでしょう。

「それで？2000もの賊を撃破できる程の兵を抱えた天の御使い様は、今どこに居るのか分かるかしら？」

とはいえ、天の御使いと言っても所詮は他国の人間。何の後ろ盾もなしにこれから生きていけるとは思えない。

ならば、それを支援する存在がどこかに居るはず。……その存在が天の御使いと言う名前を利用する事を考えているのか、はたまた

ただの御人よしなのか……。

「公孫賛の下に身を寄せたようです」

「そう……」

公孫賛と言えば秀でた才は無いものの、何でもそつなくこなす万能型と言うか器用貧乏だったと記憶している。

ただ、人間性としては野心よりも保身が強い……と言うよりは領民さえきっちり守れば良いと言う、今が乱世でなければ良い統治者になれていたと思う。

まあそんな仮定、何の意味も無いんだけど。

「問題は、『天の御使い』が現れてたかだか1週間しかたっていない、と言うことね」

桂花もその事実気付いているようで、神妙な表情で頷いた。

「運が良いとかそんなモノではありません。2000もの賊相手に義勇軍を立ち上げこれを撃破。

後にそこそこの名を知れた県令の下に身を寄せる、等と言う奇跡、最早天に愛されているとしか」

流石、天の御使いと言ったところか。

しかし今はそれだけだ。

「ま、今は目の前の黄巾賊ね。あれを狩っていたらいずれその天の御使いを見る事もあるでしょう」

話はそれまでだ、と天の御使いに関する話題を打ちきったのはい

いのだけど、一つ思い出した。

「あ、アルってばその天の御使いを探してるんだったかしら」

何と言うすれ違い。

アルって運が無いわね、その天の御使いと違って。

アルⅡプライド。

あれは私達に何をもたらししてくれるのかしらね？

・・・

「うええ！？季衣の奴、私に相談なしに勝手にそんなことしてたんですか！？」

キーちゃんの街に着くと、一先ずルルちゃんなる人物（ルルは真名らしいので名を呼ぶ時は典韋と呼ぶけど）を探すことにしたのだが、街の住民に尋ねたらすぐに見つかった。

どうやらルルちゃんは料理人らしく、定食屋さんにて中華鍋片手に俺とセーを迎え入れてくれたのだが、キーちゃんの伝言を伝えるとまさに怒髪天を衝くと言った状態になっている。

「うん、まあソーさん……曹操殿の下でよろしくやってるってのを伝えてほしいって頼まれて来たんだ。俺アルⅡプライド。こっちはチョーⅡシリュー」

「もう……居ないと思ったらそんな事になっていたなんて……。態々こんな所までありがとうございます、私の名は典韋です」

ルルちゃんはここしばらくの間運よく街を離れていた為に黄巾賊

の襲撃に逢う事は無かったようで、戻ってきたときにキーちゃんが居ない事に顔を真っ青にしたそうなの。

ああ、これは俺が伝言に行くよりちゃんと顔を合わせた方が良かったな、と他人事のように思った。と言うか無責任な事に他人事だった。

視界の端ではセーの奴がメンマ丼というカオスな料理を食べていた。

するとなんだ？あたかも「メンマ丼はやらんぞ」という意思表示をするように丼を俺から離れさせやがって……そんな訳のわからん料理を俺が欲しがるとでも思ったか、戯けめ！

メンマ丼を食うセーは放っておくことにして、視線をルルちゃんに戻す。

「俺達しばらくそこの村とか渡り歩く予定だから、今すぐキーちゃんに伝言を伝えるわけにはいかないが、遅くなっても確実にキーちゃんに伝言を伝えられるけど……」

どうする？ル……失礼、典韋ちゃん」

俺の言葉にルルちゃんは少し考えながら答える。

「あ、季衣も真名を許してるみたいだし、私も流琉で良いですよ」

あ、そう？キーちゃんがルルル言うから今さら典韋ちゃんってのも妙な感じがするんだよね。

呼び名は統一してほしい、とか言ったら真名を大事にするって考えの人々……っていかこの国の人たちを真っ向から否定することになるしな。

「それじゃルルちゃんで」

「はい」

「よし、呼び方も決定したところで、ルルちゃんはこれからどうするんだ？しばらく村回った後、あれだったらまたここに戻ってくるけど」

色々思う事もあるだろうし、陳留に行きたいと言うなら連れて行くのもやぶさかではない。

こういうのは面と向かって話し合うべきだろうしな。何せ知らん間に友人が死の危険が付きまとう兵士さんになってんだからそりや吃驚するわ。

ルルちゃんは再び顎に手を当て思考を始める。

「ま、どうせ暇人だしそのうち……そうだなー遅くても2週間後位までには来るからそれまでにどうするか決めてくれ」

もしキーちゃんと共に歩きたいってんならソーさんに口添えするのもやぶさかではないし。

「……そう、ですね。次にあなたが来る時まで決めておきますね」

「ん、それじゃこの日替わり定食一つ」

話は決まった。

なら飯食ってさっさとここを発つでしょう。

何せまだ見ぬ賞金首がわんさか居るんだからな、早急に狩らねばなるまい。

「あ、はい！少々お待ち下さい！」

そして俺の注文を受け取ったルルちゃんは、そのまま厨房に吸い込まれていった。

「……勝手に連れて行っても良いのか？」

メンマを食べ終わったセーが尋ねる。

「ま、それを決めるのはルルちゃん自身だ。子供とはいえ一人の間だからな。どうするもルルちゃんの自由って奴だ」

「ある意味、無責任で残酷な考えですな」

自由とはいったって残酷だ。誰のせいにも、何のせいにも出来ないのだから。

だからこそ、いつでも後悔のない選択をしたい。キーちゃんは自分で選択したが、ルルちゃんはどうかだろうな？

「まあ、あの子もキーちゃんと同じく、強い目をしてた。だから大丈夫なんじゃない？」

「……本当に、無責任な方だ」

「そう言うな。俺が責任を持つのは俺が請け負った依頼だけだ」

するとあつという間に日替わり定食が届いた。
早い、安い、旨いをモットーにしてるらしい。

事実、その日食った日替わり定食の野菜炒めは最高に美味かった。

「……アル殿」

「何だ？」

「オチてないぞ」

「仕方ないだろうが、なんてオチつけりゃいいんだよ」

何処までもお気楽な俺達だった。

いや、ていうか今までだってオチついてないんだから良いだろう！

act 5. 黄巾ハンター爆誕（後書き）

なんていうか、面白いです？

続き読みたいって思えるですか、これ？

俺は割と楽しく書いてるけどひとりよがってないかな？

act 6. 気と念、交わる時（前書き）

ああするかもしれない、とかこうするかもしれない、なんて言っていて簡単に手のひらを返す。俺の背後には妖怪掌がえしが付いている

act 6. 氣と念、交わる時

「ここいらで一番デカイ黄巾賊を名乗る集団が、どっかの義勇軍と戦っているらしい」

これが一番新しい情報である。

その情報をもたらした商人が言うには、義勇軍は押されていて陳留の勅使に救助の依頼を出したそうだ。

成程、それはマズイ。

ソーさんから賊狩りの依頼を半ば無理矢理引き受けてきたというのに、そのソーさんを働かせるはめになるとは。

いや、確かに俺とセーの2人で何をしろって話ではあるのだが、流石に賊の一人も狩らずにソーさんの軍が先に動く結果になるのはなんかヤダ。

そんな訳だから俺はその商人に情報料の対価として干し肉1日分を購入すると、黄巾賊と義勇軍がにらみ合っていると言う村へと赴く事にした。

さて、俺とセーは今現在荒野を歩いている。

この間も歩いてて思ったんだが異世界ってあれだな、科学技術が発達していないらしく、国と国（ここでは領土と領土とも言うべきだろうか）をつなぐ道路が整地されていない。

と言う事は当然車なんて便利な物もあるはずもなく、かといって馬を借りる金も無いので道中で見つけた商人から集めた情報を下に義勇軍や黄巾賊の居そうな場所へは徒歩で向かっているところだ。

「所でアル殿、念はどの位したらまともに戦で使えるようになるのだ？」

道中は暇なのでこうしてセーと会話をするしかないのだが、こんなところでも念の話とはセーよ、貴様念に首ったけだな？

「ふふん、あのようなモノを目の当たりにしたらそれを欲するのは至極当然のことではないか？」

「まあ確かにこのご時世、強い力があつた方が良いと言うのは事実だけでも……。

それはさておき、戦で使えるレベルともなるとなあ……トンちゃんだってまだまだだし……。

つか俺だってハンター協会のジジイにいわせりゃヒョッコだよ」

と言うより、出来れば使ってほしくないと言うのが本音である。

トンちゃんやセーに念を教える傍らで、俺はソーさんから気に関する書物を借りて読んでいた。

まあ、そもそもこの国の字が読めないと言う痛恨の事実は以前から承知の上だったので暇そうな時にフーやリンを捕まえて字を教えてもらっていたのだ。

なんやかんやで書けずとも読めるレベルにはなったので、ようやく気について記された本……と言うか竹簡と言うらしいが、それを読み漁ったわけだが、そこである確信を得る。

「気という技術は未だ発展途上の段階で、念はその発展した形である」

その書物に記載されていた気についてを念で言い換えるなら、纏と練と凝についての説明をしていると言って間違いないだろう。

体内で循環する気を意識的に練り上げ、術者の望む部位に気を集めることでその部分の力を高める。

また、その気を1点に集中し放出することで弓矢以上の威力を持った遠距離攻撃も可能である。

恐らくは強化系と放出系の方面は磨かれていたが、その他の系統が発達するのはまだ先の事なのだろう。

それもそのはずで、例えばなにかを具現化するなどと言う発想がそもそも無かった、と俺は考えている。

しかし、気を放出したり体内で気を移動させるという考えが出来るのなら、道具に気を送り込む……念で言うなら周みたいなの事もある……思いついていてもおかしくは無いと思うんだがな。

後は絶だが……気配を絶つ、と言う行為が気につながると言う考えもまだ無かったようだ。

更に言うなら凝を扱う技術としての流もまだ無かったようで、しかし名前が無いだけで流を使える人間は探せば存在するのではないかと思う。

結局、思うだの、くだと考えているだの、予測の範囲でしかないのだがほぼ間違いなく気は念の元型だと思う。あ、また思う使っちゃった。

「ふむ……確かに、アル殿の技を見た時初めは気か何かかと思ったのだが、それは正解だったということか」

その通り。

恐らく俺の居た世界でも、気と言う技術を長い年月をかけ、子々孫々にそれを受け継いでいき、飽くなき研鑽を経て念と言う力に昇華したと俺は考えている。

とどのつまり、トンちゃんやセーはその技術の完成形をいきなり教えてもらっているわけだ。

「? 教えてもらうなら完成したものの方が良いと思うのだが……」

俺の説明に対して首をかしげるセー。

確かにセーの言う事も尤もだ。

しかし、しかしだ。

「それでは気と言う技術を、力を磨いている奴らがあまりにも報われないじゃねえか。

例えるならそうだな……何も知らない手探りの状態で気を高めて、己を高め、ゆっくり歩み続けているところを俺達は横から馬でぶちぎるってどこか」

いきなり答えだけを示すってのは人間の成長を妨げにしかならない。

いずれはこの国の気は念と呼べるものに昇華するはずだ。

その努力は褒められるべきであり、俺みたいな余所者が横やりを入れていいものじゃない。

言うなれば、長きに渡って熟成され続けてきた秘伝のタレに味の素を入れるが如き所業。

……分かりづらいつて? まあなんだ、とにかく俺は念をあまり教

えたくないんだよ！

「だからまあ、俺はお前とトンちゃんにしか念を教える気は無いし、お前とトンちゃんも出来れば念は広めないでほしい。」

本来、この国で気が念と呼べるレベルに達するのはもったもった先の事だろうからな。

俺はその飽くなき研鑽こそ称賛されるべきものだと考えている」

「……アル殿……」

どうした、感銘を受けました！みたいな顔して。ふふんやっぱ良
い事言うだろ、師匠っぽいだろ？

「意外と深く考えていたのですな」

「やっぱ酷いな、この国の人間は」

「確かに、漢王朝を憂いて立ちあがったのが黄巾党の始まりと言う
のに、結局はただの賊に成り下がっていると言うのは何とも皮肉な
話ですな」

いや、そっちもそうだけどさ、荀？とか、荀？とか荀？とか酷い
んだよ。

・・・

「俺はその飽くなき研鑽こそ称賛されるべきものだと考えている」

成程、と私は素直に思う。

そして自分の事しか考えていなかった私は自分を恥じた。

確かに、私は念と気の関連を考えた事が無かった。
いや、何となく似ているなとは思ったがそれだけだ。

とはいえ、念を知らなかったのだから仕方ないかもしれないが、
こうして念を知った今、その責任は果たさねばなるまい。

「意外と深く考えていたのですな」

「やっぱ酷いな、この国の人間は」

少し気恥ずかしくなって思わず言い返してしまった。
軽く感銘を受けたのは事実なのだが。

「確かに、漢王朝を憂いて立ちあがったのが黄巾党の始まりと言う
のに結局はただの賊に成り下がっていると言うのは何とも皮肉な話
ですな」

そしてアル殿に返答しつつも、私はある事を決めた。

念は教わるが、現在の『気』のみで至る事の出来る段階までしか
教わらない、と言う事を。

幸いなことに、私は念を肌で感じる為の瞑想しかしていない。
ならばこれからすべき事は一つ。

……自分自身の力で、アル殿の居る所まで登ってみせる。時間は
かかるだろうが絶対に到達してみせる。

「常山の昇り龍の名は本物であることを示さねばなるまい」

「あ？何の話？」

……独り言を聞かれました。しかも恥ずかしい所を……。

「気にするな」

誤魔化すために、とりあえず凄んでみる事にした。

「そ、そうか……」

良くわからない、といった様子でうろたえるアル殿を視界の端に置きながら、私は思考を続けた。

……とりあえず、今は黄巾賊を何とかしよう。

実戦に勝る修行は無いからな。

念だけではなく、この槍も更に鍛えなければ。

私は空を仰ぎながら、新たな決意を胸に抱くのだった。

「どうした？空なんか見て」

「気にするな」

「そ、そうか……」

とりあえず凄んでみた。

...

敬愛する我が主、華琳様からその命令を下された時、私の目の前は真っ暗になった。

私は自分で言うのもあれだが、馬鹿だ。そんな事言われずとも分かっている。

すぐに頭に血を上らせるし、華琳様の事になると周りが見えなくなるし、それで幾度となく華琳様に迷惑をかけてきた。

それでも、私は華琳様の為にこの剣を振るうと誓ったのだ。
その誓いを立ててから今まで、その思いは色あせる事無く私の心の中に留まっている。

華琳様の命とあらば万を超える敵とも戦えるし、華琳様の為とあらば何だって斬ってみせる。

それに伴って誰かから恨まれる事もあるだろう。

しかし、私は華琳様の為に全てを斬り伏せる覚悟だ。

……だが、私にも意思がある。とても許容できない物もある。

しかし、それでも華琳様の為を思えば泥水をすすることだって出来ると思っていた。

そしてある日、アルの奴から言いつけられた「れんのこんとろーる」とやらの練習をしていた。

アルがいうには体内のオーラ……気を練り上げ体外に放出する（私でも一字一句覚えてしまう程に何度も言われた）と言う物なのだが、私の場合力の入れ方がイマイチ良くわからないのだ。

力を込めると暴発というか……気をその場に留められないし、かといって力を抜けば「てん」の状態にしかならなかった。

何と言うか、私には集中力と言う物が足りないらしい。

動かずにその場でジツとして心を静める、と言う行為がどうしても出来ず、それどころか華琳様が鍛錬の様子を見に来たらアルより素早く反応する始末でアルからは「まるでぶろふの犬」だな、と言われた。

どういう意味かはよくわからなかったが、誰が犬だとりあえず怒鳴っておいた。

そしてどうすれば良いかもよくわからないまま、今日も元気に剣の鍛錬と同時に念の訓練もしていたのだが、今日は未だにアルが来ない。

どこで道草を食っているのだ、と内心毒づくもののこうして念を教わったことにより剣速や剣の威力が上昇したと言うのも事実なので、あまり強く文句は言えない。

そんな中、ひたすら無心になり剣を振っていたところ、先述した私の主が私の下に足を運んでこられたのだが。

「アルからの伝言よ。

しばらく念の鍛錬は中止、剣の鍛錬は良いけど念の鍛錬の代わりに気に関する書物を読んでもらうから」

瞬間、目の前が真っ暗になった。

「……申し訳ありません、華琳様。

私はどうやら耳が悪くなったようですので、もう一度確認させてもらってよろしいですか？」

華琳様に無駄な行動をさせてしまうとは部下失格であるが、私の耳が悪いのだ。後で私の耳には罰を与えねばなるまい。

そして耳を澄まして、心を澄ましてもう一度華琳様の御言葉を聞いた。恐らく今までの中で最高に集中した瞬間だろうと自負している。この状態で念の鍛錬を重ねれば「れん」などすぐに終わるに違いない。

「勉強しなさい」

世界が反転したかのような錯覚を覚えた。

一字一句、華琳様の口の動きすらゆっくりに見えて、嗚呼これが死の間際か、と理解する。

手に持っていた剣を杖代わりにしなければそのまま倒れてしまっていただろう。

だがしかし、その手が震えて自身の体を支える事すらままならない。

そしてそんな私の事など知ったことかと言わんばかりに華琳様は口を開かれた。

「そうね、毎晩寝る前に気に関する教養をどこまで深められたか質問するわ。」

答えられなかったらその日闇に来るのは禁止ね」

先程目の前が真っ暗になった、と表現したがあれは誤りだ。
本物の暗闇がそこにはあった。

視界は真っ暗だがその半面、その時私は真っ白になっていたに違いない。

その光景すら華琳様はお楽しみになられているように見えた……
ひよっとして、からかっておられるのか？ 私は淡い期待を胸に抱いたのだが。

「ここに気に関してまとめてある竹簡があるから、今から読みなさい。」

ゆっくりでいいから、たとえば1日で全然進まなかったとしても、
「ちゃんと学んだ」と言う事実が私に伝えられたのならば、その日
闇を共にする事を許すわ」

「か、華琳様あゝ」

その幻想はあっさり打ち砕かれてしまった。

「甘えてきても駄目よ、春蘭にはそれだけ期待してるわ……だから、
それを裏切ったら泣いちゃうから」

「頑張ります！！」

つい反射的に首を縦に振ってしまった。

これがあるか、アルの言う「ぱぶろふの犬」と言う奴か。

……誰が犬だ!!

・・・

大梁義勇軍。

確かあの時の商人はそう言っていた。

その大梁義勇軍は今現在、小さく見え始めている街に居るらしい。

「んん……見た感じひきこもってるっぽいな、しかし馬防柵程度で罨の気配は感じられん」

円はあまり得意ではないが調子次第で3〜40m行けるかな位なので、こういう開けた所で使ってもあまり意味はないのだが。

一応街が見え始めてからは円を使って歩みを続けている。

「罨の一つも仕掛けられてねえってのは、俺らみたいな旅人が引っ掛かるのを防ぐためか？」

いや、旅人なら戦が起きている場所を事前に察知し避けて通るはずで、こんな場所に来るはずは無い。

俺らみたいに、戦う事を目的とした奴ら以外は」

「ふむ……罨を設置するほど余裕が無い、と考えるのはどうだろうか」

俺の意見に対してセーが少し考える動作をした後に答える。

確かに一理あるな。そしてその考えを裏付けられるかのように、馬防柵の下まで辿り着いた時に分かった事。

「この馬防柵もとにかくなんでも良いから資材をかき集めて作った急造のモンだな。いくらなんでも準備が足りなすぎじゃね？」

いや、義勇軍はボランティアみたいなものだし、仕方ないのか……」

「何にせよ、義勇軍の者達と顔を合わせてみない事には分かりませぬな」

ま、その通りだな。

……と、思った瞬間、門から誰かが出てくるのを見た。明らかにこちらを意識している。

恐らくは義勇軍の兵なのだろう。こちらに向かってくる人影をそのまま待つ事にした。

「待て、貴殿らは何者か。ここは直に戦場と化す、用が無いのであれば早急に立ち去る事を勧める」

語気は強いものの、その表情からは疲労の色が隠せていない。ところで、俺は異世界生活を続けていて一つ思った事がある。

……名の有る武将が大体女性ってどゆこと？

そして目の前の顔に傷をつけながらも凜ッとした雰囲気を持つ女性も、恐らくは強い。

……と言うよりか、かなり自然な纏を纏っており、恐らくは気使（仮称）だと思う。

とはいえ、やはり義勇軍は黄巾賊に押されているのだろう。

そして、一応俺達は黄巾賊で名のある奴らを狩りに来た。

つまりはどちらかと言えば義勇軍の味方と言う事になるだろうが、俺達2人が加わった所で戦況が変わる等と目の前の義勇兵は思うまい。

俺自身も思わないし。賊が何人いるかすら知らないしな。

とりあえず素直に義勇兵の質問に答える事にする。

「一言で言えば……黄巾賊ぶっ殺し隊？ただし2人しか居ない、みたいな」

「……ふざけてるのですか？戦場とはそんな甘い覚悟で入れるような場所ではありません!!」

あ、ふざけ過ぎた。セーの奴もあきれた目でこっちを見ている。

なんか真面目そうな委員長気質っぽい雰囲気だもんな、自重せよ。

ま、念使いには念使いしかわからんメッセージの伝え方があるさ。

「そりゃ失敬……でもな、俺らもそれなりに力を持ってるからこそこの場にやってきたんだなこれが」

指から発した念で、文字を造り出す。

念の為に練でオーラを発し、自分も気を扱えると言う事をアピールした。

これらを見た目の前の義勇兵の女性は少しだけ驚いた表情を浮かべるものの、すぐに気を取り直して口を開く。

「貴方も気を使えるのですね……成程、それならば戦力に不足は無いと考えても良いでしょう」

「あ、そういやここに来るまでに商人に聞いたんだが、陳留の勅使が援軍に来るらしいな。それまでこの街を保ち続けりゃ良いってことか？」

「それも含めて中で話をする事にしましょう。こんな所で立ち話もなんですし」

「どうやら街の中に入れてもらえる程度には信用してもらったらしい。」

「背後に居るセーは多分何をしたかは分からなかったようだ。まあ仕方ない。」

「多分俺の中のオーラが強まった事しかわからなかったのだろう。何したんだお前みたいな視線をひしひしと感じる中でとりあえず自己紹介することにした。」

「そりゃどーも。俺の名はアル、アルIIプライドだ。変な名前だっと思うかもしれねえけどヨロシク」

「俺が名乗ったのに続いてセー名乗りを上げる。」

「私の名は趙子龍と申す」

「常山の昇り龍はどうした？」

「うるさいぞアホ殿……じゃないアル殿」

「師匠に対してアホとはいいい度胸じゃあないか……」

その覚悟だけは認めよう。だがしかし、些か愚かだったと言わざるを得ないな。

クックック、と黒い笑みを浮かべる俺に対し、セーの奴はフッフツフと不敵な笑みを浮かべていた。

「ええっと、仲がよろしいですね。私は楽進と申します」

そんな中、困惑しつつも自己紹介をした楽進さん。

ぐふふ、なんだか初々しい反応ですね、楽進さん。

多分このノリについていけないんだろうなあ楽進さん。

さてさて、賊もいつ来るか分かったもんじゃないし、状況と今後の方策を知るためにもさっさと街に入ろうか。

「楽しみだねえ」

思わず一人ごちた。

今回は多分、前回みたいにくまくは行かないだろう。

四方が開けている土地に、疲弊した義勇軍。

どう考えても賊共の方が人数が多いはずで、なら話は簡単で四方から同時に攻め立てたら良い。

恐らくヒットアンドアウェイを何度も繰り返しているのだろうか、黄巾賊は。

負け戦こそ戦の華だ、とは良く言ったものだ……俺には出来ない。

やっぱ勝たないとつまらない。

最早詰みの盤上でも、盤上をひっくり返してでも負けたくない。

「お前もそう思うだろ、セー？」

「久々に思い切りこの槍を振るえそうで、正直かなりゾクゾクしていますぞ」

そりゃ重畳。どちらが多く敵を狩るか、勝負するか？

先程の黒い笑みで再びセーを見据える。対するセーも、先程の不敵な笑みでこちらを見返してきた。

「いやいや、有象無象を斬ったところで所詮は雑魚。目指すは大将首、だろう？」

いいね、良い目だ。

念が使えるように使えなろうと関係ない。

今セーの奴が浮かべている強い意志を秘めた目を出来る奴こそが、真の強者だ。

そんなセーだからこそ、念を教える気になった。べ、別に街中で脅されたからとかじゃないんだからな！勘違いするなよ！

「おーけーおーけー、じゃあ競争だな。先に大将首取った方が勝ちで、負けた方に対して一つだけ命令が出来るってのはどうだ？」

「……良い考えですな。後でその発言、後悔させて見せましょう」

ひょっとして俺が念を使えるから、そのアドバンテージを利用したかとも思っているのか？

だとしたら浅薄だな、チヨールシリュよ！

今ここに、黄巾狩りスタートの合図が鳴らされたのだった。

a c t 6. 氣と念、交わる時（後書き）

もう1人の天の御使いはまだ出ぬ

act 7. 失敗は成功のなんたら

街に入ると、楽進は俺とセーをある2人の下へと連れて行った。
見たところ、楽進とこの2人がこの街に滞在している義勇軍を束ねるリーダーらしい。

どうやら周りの兵と作戦を概要を詰めている所らしく、楽進が俺達を連れてきたのを見て少し首をかしげていた。

ほほう、自己紹介しろと言うことか。

「作戦会議中に邪魔して悪いな。俺はアルIIプライド。変わった名前をしているかも知れんが、まあ異国の者だ。そこでこっちはチョコIIシリュー。」

2人と微力ながらこの軍に協力させてもらいたく馳せ参じた次第」
態々時間を割いてもらっているのだ。礼には礼で返そう。

丁寧な自己紹介を試みたが、別にそう言うあれは要らなかったらしい。

「お？そっかー、ありがとな！うちは李典や！」

「私は干禁なのー」

んー、なんか割とすんなり受け入れてくれた。

何と言うか、それどころじゃないと言った様子か。

それも無理もない。ここに来るまでに周りを見ていたが、あまり飯をとれていないようだ。疲れが隠せていない。

どうやら食料を補給しようにも、そこを賊に突かれるらしい。かといってそちらに護衛を回そうものなら兵力が減った部分を突かれる。

成程、多少は頭の使える奴もいるようだ。

と言うか、その状況あれだな。攻城戦で攻められている弱小国みたいだな。とか言ったら怒られそうだから何も言わない事にする。

うむう、栄養剤なら作ってやれない事もないが……薬の量と質で込める念の大きさと言うか……。

念ってのは元々俺の生命エネルギーだからな、オーラの総量に依存するわけだが……。

まあ簡単に言うと、これから戦闘がはじまると言うのに無駄遣いは出来ないと言うわけだ。いや、無駄とか言う失礼ここに極まるって感じだな。どちらにせよ今回は戦闘に勝つことではなく守りきることの方が重要だろう。

こないだは戦闘の気配が見当たらなかったから存分に使ったのだが。

「まあこう見えてここにいるセーは名の知れた槍使いだ。例えば万を超える賊共にも引けは取るまい」

こいつらの信用を得るには、俺では名が広まってなさすぎる。いや広げる気は無いが。そういう事情も相まって栄養剤的な物の精製は行わない。知らない人からものもらっちゃダメなあれもあるし、何かしら信用を得ないことには始まらない。

現に「趙子龍というやはり……」みたいな感じでざわざわして

いる。良かったなセーよ、お前の名前『常山の昇り龍』は本物だ。
この結構不利な状況に一人の猛者。やはり期待せざるを得ないと
言う事だろうな。その期待には槍捌きを持って答えると良い。

ニヤニヤしながらセーの様子をうかがった所、ジト目で俺を睨ん
だセーの口からとんでもない言葉が飛んできた。

「そしてこちらは『天の御使い』が一人と名高いアル＝プライドだ。
先日2000に及ぶ黄巾賊のうち200を彼が単騎で撃破。

いやはや、私の出番などありはしなくてな、ここでその鬱憤を晴
らしてやろうと思っていたところだ」

その言葉に俺は驚愕し、周りは沸いた。

おい止めろよ……何だよその目は……俺を見るな、期待した目で
見るなア……！！

いやまあ確かに現状を打破する手立てが無い事は無い。しかしこ
れはあまりに危険な……と言うよりは「殲滅」するだけの俺の力の
使い方だ。

そんな俺の殺す力が天の御使いなどともてはやされて良い訳が無
い。つーかこんな形で目立ちたくない。

どう考えても俺に対する意趣返しだろう。

ぐぬぬ、信用を得るためとはいえ些か早計過ぎたということか……
……！

……

何を言っているんだ、と言う恨めしそうな目でアル殿がこちらを
見ている。

ふふん、私を見世物にした罰だ。

成程、彼らの信を得るには有効な手段だろう。

しかしそんな事の為に私は今まで槍を振るってきたわけではない。とはいえ、そっちがその気なら好きなように言わせてもらった。

ニヤニヤしていたアル殿が一転して驚愕した表情を浮かべる。

くふふ。

これで満足したし先の事は水に流してやらんことも無い。

「さて、我々の素性を明らかにした所でそれが本物か証明する術がないのだが……」

私の懸念はそれに尽きる。

結局槍働きを以ってそれを示すしかない。とはいえ、私やアル殿が加わった程度で戦力差が簡単に埋まるはずもない。

話を聞くには義勇軍は2000弱で、黄巾は1万を超えており、正確な数字は分からないらしい。

どう考えても曹操殿の援軍までなんとか耐えるしかあるまい。

この兵力差を打ち破るには、軍略と兵士一人ひとりの質が要る。

しかしその両方が足りない今、何とかこの街で耐え抜くしかないのだろう。

故に悩む。

何せ黄巾賊を追い払うのに、どれだけの被害を要するのか。

死んだ後、残された家族はどうすればいいのか。

生き残るために立ち上がった。

しかし生き残るだけでは破壊の爪痕を癒せない。

それでも戦わざるを得ない状況で、一体どうしたらいいのか。

考えても結果が出ないのは仕方がないだろう。

かくいう私もどうすべきか考え付かない。この街の兵たちを無駄死にさせないよう、前線で槍を振るう心算ではあるが、それだけだ。結局、私はこの場における異分子……『天の御使い』たるアル殿に頼るしかなかった。

そうして頼ったアル殿はただ一言。

「そーだな、とりあえず兵力差を把握するか」

まるでそこらにお使いにでも行くかのような気軽さで、斥候を申し出るのだった。

……天の御使いと掛けたわけではない。

・・・

戦なんてのは所詮外交手段の一つに過ぎない。

諸国に力を知らしめる為だとか、その国ないしは領地が欲しいとか、何にせよお偉いさんの一言で下々の人間が死ぬ事になるとも言えれば良いだろうか。

人あつての国なのだから、戦わずに国をとれるのならそれに越した事は無いし、基本的には税だったり給金だったり安全だったりを保障してくれるのなら上の人間が誰だろうと、下の人間はあまりこ

だわりは持たない……と、俺は思っている。

兎にも角にも、食うために戦争まがいの手をするとか本当に頭が悪いんだなあ、と言うのが黄巾の連中に対する俺の評価なのだが（時代が時代だし、賊に落ちるしかなかったのかもしれないという点だけは同情してやらんこともない）、中々どうして頭の良い奴も居たもんだと評価を少しだけ改めた。

さて俺は今、夜討ちを敢行している。一人で。

黄巾賊のアジトを探すのには少し手間取ったが、楽進達から見せてもらったここ周辺の地図と見比べてなんとか見つけだすことに成功した。

理由は簡単で、俺の力『押し売り毒林檎』ポイズンメデイスンは対象を選ばない。いや、選べない。

故に集団で行動する時には能力を使えない。しかし単独行動をするのならその力を十全に発揮できる。あ、この能力造るにあたって「普通」の毒への耐性は身につけているから俺の心配はいらないよ。つってもガチに致死性のある猛毒だとヤバいから、それに合わせた能力も作ろうかなとは思っている。

まあ、それをやろうと思ったらやっぱり再び薬学の資料を漁ったり、ガスマスク的な物も漁らねばなるまい。

つまり現時点では致死性のある毒を馬鹿みたいにはらまく事は出来ない。

いや出来ない事も無いが自滅する可能性を考慮するとしたくない。

それはさておき、一先ず敵の戦力を把握するために斥候の真似毎をしているというわけだ。

今回やってきたのは洞窟。出口が別の所につながっているため全

滅は難しいだろうが、生き残った奴が居た方がこちらもありがたい。情報を色々と教えてもらわねばならないからな。

その代わりここを襲撃したと言う事実がばれてしまうのは痛いが……。

それは仕方ないと割り切っているのだが、事のついでに偉そうな奴の首も取って来ることとセーの奴に一步リードも狙っている。

狙ってはいたのだが……。

「中々どうして出来る奴も居たわけだ。雑魚雑魚しいと思っていたのに」

手際の良い指示もあったらしく、黄巾賊共は早々に撤退していた。ただの賊を相手取るのなら、もっと多くの死体が詰み上がっていたはずなのにな。

つつても散布したのは眠りの効力を持った薬で、止めは俺が差し回っていかねばなるまい。

だがしかし、自身のねぐらの異常にいち早く気づいたらしい『男』は、すぐに自身の味方を避難させたようだ。まあ、流石に眠りかけてる奴全員を……と言うわけにもいかないらしく、ここで時間稼ぎをすることで眠りこけてる連中を回収するって考えだろうな。

さて、その男とは今日の前に対峙している。そしてここは洞窟の外で、風も強い。

毒をばらまいたところで念を込める段階で察知されるだろうからあまり有効な手段とはいえない。

ベンちゃんに毒を込めてやるか……はたまた堂々と立ち合うか。

ま、正面切って戦う方が俺も好きだしな。毒にばっか頼るのも後々不安だ。

「おいおいにーちゃんよ、どんな妖術使ったかしらねえがやってくれたなあ？」

男は俺に向けて錆びれた剣を向ける。

錆びれた鎧のような物にボロボロの布切れをそのまま体に巻きつけただけのような服装。

鎧を脱ぎ、剣を捨てれば乞食と言われてもおかしくない風貌をした男であるが、その布から見える肉体は十全に鍛え上げられていると見てとれた。

どうやら他の黄巾賊と共に洞窟の反対側へ向かった後、わざわざこちらまで回ってきたらしい。

洞窟を造っている目の前の丘は、そこまで高くは無い。だからと言ってそこを上ってこちら側まで来るとは何とも馬鹿正直なことか。

セーやらソーさんやら、気を扱えなくてもなんとなくその存在を察知できる人間は多々いる。

そいつらは例外なく念を操れる才能があるとみて間違いない。そして目の前の男も、恐らくそれを察知した為に態々この崖のような丘を登って下りてきたのだろう。全くご苦労な事だ。

「毒かなんかしらねーが、なーんか嫌な予感すると思ったんだよなア……したらこのザマよ」

「そら御愁傷さま。まあ良いだろ？戦で一番危険なのは身近に使えねえ味方が居る事だろうし」

「はっ、良く言うぜ。この洞窟に入口が一つしか無かったらそのまま全員殺す心算だったんだろ？」

「情報欲しいから一人は生かすけど？」

「その後殺すだろ、何も変わんねえよ」

快活に笑う男をみて、俺はこいつには好感が持てる、と思った。俺も突きつめればただの人殺しで、いつ殺されたって文句は無い。そういう開き直りに近い覚悟を、こいつも持っている。とはいえ、人攫いだの強盗だの、生きる上で必要な事以上の事をこいつらはしでかしているんだ。

「ま、是非もねえな。こいよ金髪、端から命のやり取りしか残ってねえだろ」

錆びた剣を俺に向ける。斬れ味に期待するよりもそのまま撲殺してきた剣だろう。

たまにはこうやって体を動かすのも悪くない。

「そうだな。いざ尋常にっつてのもおかしな話だが……来いよ、遊んでやる」

剣に向けた男に対して、俺も腰からベンちゃんを取り出して練をする。

それを見た男は壮絶な笑みのようで、それでいてチャンバラを楽しむ子供のような笑みを浮かべながら斬りかかってきた。

トンちゃんのもそうだったが、全体重を込めた振り下ろしはかなりの威力で、周で覆っているとはいえ何度も馬鹿正直にベンちゃんを受け止めてはいずれベンちゃんが壊れてしまう。

故に受け流す。

とはいえベンちゃんはただのナイフで、刀身の長さなど比べるべくもない。

軽く剣とナイフが触れた瞬間に体を横に流す。

それと同時に剣を受け流すと、剣は元々俺が居た場所に叩きつけられた。

「はん、変な形の短刀握って舐めてんのかって思ったが……存外、それでもねえらしい」

「馬鹿野郎、これは稀代の殺人鬼が作った短刀^{ナイフ}だぞ？そこいらのモンと比べるんじゃない！」

思わず口を衝いてしまった。これはクロロに植え付けられた呪いかもしれない……。ベンちゃんの事は確かに好きだが、元々武器として有用だから使っていたと言うのに、クロロの奴が……クロロの奴が……。

「お、おう……」

男は俺の喜怒哀楽を見て軽く引いている。

クロロの奴にベンズナイフの成り立ちとベンニーの生い立ちに関して死ぬほど講義を受けた為に、洗脳の如く植え付けられたベンズナイフの有用性^{チカラ}。

いや、前からベンズナイフは愛用していたしその有用性は分かっていたつもりだったが、クロロほど事細かにベンニーについて知っている者はいないだろう。

耳にタコが出来るほど聞かされ、「もう許して下さい」と懇願した瞬間、「ならば依頼だ、俺の話を聞け」と返してくる。

俺の力量では例え依頼主と雇用者の関係が無くても、クロロには勝てない。本気でそう思った一件だった。

結局、その件以来俺もベンズナイフ改め愛をこめてベンちゃんと呼ぶようになり、ベンニーをベンズ教教祖として崇めることとなった。

ときどき正気に戻る事もあったのだが、その都度クロロによる講義を受けたのもうベンちゃん無しに生きていく事は不可能だろう。

……何の話だ。

「ま、何だ。いつまでもお前だとか賊だとかじゃ閉まらねえな。名前教えろよ、ここじゃ〇〇討ち取ったりーって名乗りが無いと手柄になんねーだろ」

殺した事の証明（首持ってくとか）さえできればなんでも良い気がする俺からしたら、何とも面倒な事だとは思う。

しかし、この男は他の連中と違い道理を弁えている。弱肉強食の理を本能で理解し、それに従う。

だから賊として弱者から搾取するし、弱者から反逆を浴びる事も納得している。

有体に言えば、こいつは人間だった。

だから俺はこいつを殺すのだとしても、人間を殺す為の方法を以って殺す。

こないだの黄巾賊は駆除したが、今回は殺人だ。

人を殺すからには、そいつの事を忘れるつもりはない。
そんな俺の姿勢をヒソカやクロロは理解できないようだが。

まああんな人格破綻者ども（直で言ったら殺されるので影で言う）
は俺の考えなど理解できないのだろう。

「おっと、名乗るなら自分からだよな。俺はアル・プライドだ」

くるとベンちゃんを回しながら名乗る。

それに対し、剣を肩に担ぎながら賊もまた口を開いた。

「俺ア馬元義ってモンだ。まあ俺が生き残ったら覚えててやるよ、
天下の黄巾党に一人で殴りこみにかかった大馬鹿野郎ってな！」

「くは！それなら俺も覚えててやるよ、群れてた割に一人の男に殺
された憐れな奴ってな！！」

今まで狩った黄巾の奴らと比べてもかなりの大物だ。こんな賊で
終わらせるのがもったいない。

だがしかし、奴は賊で、俺はそれを狙う狩人。ならば戦うのが常
だろう。

だけど、楽しくなってきた。脳内麻薬が頭を支配する。

さて……『念』は今この世に存在しないはずで、それを使うのは
些か卑怯だな。

練を解き、自然体な状態に戻る。

それを見た馬元義は不服そうな表情になるが、俺は笑う。

「何だ？ ひょっとしてこの俺に全力を出させようってか？ だったら力を示せよ、俺に！」

「おいおいアルさんよ、そのひ弱そうな腕で俺の一撃を受け止められんのか？」

さっきのあれは、氣って奴だろ？」

「氣を扱うには肉体も鍛えにやららん。より強い氣を扱える奴ほど肉体も比例して強い。」

つまり俺は氣なんぞ無くても強い！！」

「はっはっは！ 抜かしやがったな！ 死んで後悔すんなよ！！」

俺の言葉にひとしきり笑うと、馬元義は一瞬で肉薄してくる。さて、念も無い状態であのような鉄の塊をベンちゃん受けるつもりは無い。

……かといってこの身一つであの一撃を止められるはずもない。

故に回避する。もしくは剣の側面を平手で叩き、受け流す。

横に一閃なら前者で振り下ろしに近い縦の角度なら後者。

俺は馬元義の出方を知るために接近しては迎撃され、それを回避するか受け流すかするとすぐに離脱、と言うのを何度も繰り返していた。

その間に馬元義はその場から一步も動いていない所を見ると……まあ力任せってところか？

馬元義はかなりの怪力である。そして彼の戦い方はそれに合わせ

た一撃必殺。

一撃必殺と言うと、逆に言えば避けられれば隙も突く事が出来るだろう。特に横に振りぬいた後等体が大きく開いてしまっている。しかし、そんな事は馬元義も承知済みらしく、どうにもその隙を突く事を待ち望んでいるように見える。

なるべく手の内をさらさず、晒す相手は殺すか信頼できる者でなくてはならない。

そんな理由も相まって、念を使うのをやめたんだが……ふむ、虎穴に入らずんばとも言おうしな。

つか、ワルちゃんを使えば一発で決着がつくんだが、こんな所で弾は使いたくない。

……まあ、出し惜しみをして死んだらすっげー恥ずかしいんだけど、死んだ後の事など知った事か。

一先ずは、馬元義の野郎を仕留める！

俺は足にグッと力をこめ、一気に接近を試みた。

馬元義はそれを待ち望んだかのように、目の前の空間を一刀両断すべく……もちろん、その空間には俺も居るのだが、ともかく剣を縦に振り下ろした。

後は剣を避け、一撃見舞うだけ――

「あ」

しまった気を抜いた。抜いてしまった。今までの経験から、任務中気を抜いてうまく行った試しがない。

仕事は家に帰るまでが仕事だと言うのに。馬元義へと近づく体に

反して脳内ではなんでも良いあら回避しろと警鐘を鳴らしている。

すなわち、ここでも何かやらかしが入るかもしれない。俺は反射的、いや本能的に前進する体を無理矢理捻り、側面へと転がる。

俺の背中を軽く刃物か何かが掠め通ったかのような感覚が襲った。恐らくあのまま突っ込んでいたら相打ちぐらいにはなっていたかもしれないが、相打ちじゃダメだろう。

「っ……!!」

無理矢理体勢を変えたのだから、無事に立っていられるかどうかはそいつ自身の問題だ。

すなわち、無様に地を這っているのは俺の責任で、どうしようもなく戦闘中に気を抜いてしまった代償ともいえる。

そして、ただ斬られただけの痛みとはまた違う、じわじわと響くような感覚。

……毒、か？

掠めた背中から伝わる痛覚と、今まで多種多様の毒をこの身に納めたこの身体が俺に伝える。

速効性に優れているあたり、効力はあまり長くは無いのかもしれないが、長くなくてもしばらくは毒の回復ないしはこの場から離脱し、解毒剤を造る為に毒を解析しなければならぬ。

ぶっちゃけ、侮っていた。このミスは全部俺のせいだ。

奴は、奴は……俺と同じ、殺し屋向きの戦闘技能を有していた。

あの豪放磊落な振る舞いは飽くまでも敵を欺くための擬態。

ボロボロの鎧と布切れを纏っていたのも、こんな奴が暗器等持っているはずが無い、と判断させるための手段のはずだ。

本来の馬元義は、もっと狡猾で、獲物を逃さないための策を何重にも巡らせていたのだろう。

恐らくは、俺が襲撃を始めたその瞬間から。

「チッ……さっくり心臓をいただくつもりだったんだが……」

馬元義の巨体に似つかわしくない、俺のベンちゃんよりも一回り小さいナイフを手で弄び、こちらの様子をうかがっている。

どうやら念を警戒しているらしく、確実に止めを刺すまではこの警戒は止まないだろう。

……はつきり言えば、この程度の神経毒なら動ける。流石に動きは鈍るが……。

致死性のある毒を使わなかったのは、まさかこんな所で襲撃に遭うとまでは予想していなかったからか。

さて、この神経毒は馬元義を侮った罰として謹んで受け入れよう。ただし、この場を乗り切ってからの話だ。

「つたく、先程の愉快なおっさんはどこへ行ったのやら。
すっかり暗殺上手な戦闘機械キリングマシンの顔だな」

「ふん、お前ほどの使い手だ、正面切って戦う程俺は馬鹿じゃねえよ」

やっぱり念を警戒しているのか、じりじりと近寄ってくる者の、急接近してくる事は無かった。

全く、これほどの男だ。恐らくヒットアンドアウェイでじりじりと義勇軍を追い詰めていったのもこいつが居たからこそだろう。だからこそ、ここは一度引いておきたい。こんな奴が他にも居るのだとしたら、かなり面倒だ。

そして、毒を受けた状態で念を使ってもあまり効力には期待できないだろう。

そもそも念とは念能力者の肉体や精神の力に依存している。つまりそれを著しく削られた今、それに期待する方が間違っている。恐らくは先程までの動きはなんとか再現できる程度のはずだ。

とはいえ、あっちは念を知らず、こっちはこっそり念について嫌になるほど教わってきた。

……だまされっぱなしってのもムカつく話だ。

「ちっ、しゃーねえ。本気だすわ、実は今までは3割の力しかだしてなかったし。まだ本気とかみせてねーしー」

「そうだな、全力を出さずに死ぬってのも残念だろうし好きにしろ」

本当だし、まだ余裕だし。

おどけながらも練を練る。それだけで体が軽くなったと錯覚を覚えるが、毒自体は消えていない。

どこまでも練り上げ自身が今出せる最大値まで力を昇華させる。こんなだけあれば馬元義の奴もつぶせるだろうが、潰しても情報が得られねば意味が無い。

何より、奴の部下が潜んでいる。

演技をしていた馬元義が本来の姿であればそんな事はしないのだろうが、実際はそうではなかった。

ならば、他の奴らも潜んで俺の隙を窺っているに違いない。馬元義は囷で、馬元義が俺を殺せたなら問題ないが、駄目だった場合は周りの連中が俺を殺すなり捕まえるなりするのだろう。

黄巾賊の中でも強い連中と弱い連中……後者は恐らく黄巾を名乗るだけのチンピラなのかもしれない。

まあとにかく、潜伏してるやつが居ないか確認をするためにもこうして練をしている。

続いて念を周辺に伸ばし、俺は円による30m程の簡易レーダーを造り出した。

……やっぱ居るな。数は4、範囲外にも潜んでいる可能性がある。

俺はそれらに気付かないふりをしながら、ベンちゃんを取り出す。

「さあて、死力を尽くして殺り合おうじゃねえか」

その言葉を聞いた馬元義は錆びた剣を放り投げ、本来の武器だと思われるナイフを手に取り身構えた。

馬鹿め、試合にゃ負けたが勝負には勝たせてもらうぞ。

「……また今度な!」

「なっ!?!」

俺は最も近くに潜んでいた黄巾賊の下まで一気に駆ける。

そして相手が反応するより早く『押し売り毒林檎』で眠りの効果

を植え付けた毒をベンちゃんに込め、軽くそいつの事を斬る。

気絶したのを確認するとそいつを抱え、更に移動速度を上げる為に両足に念を集中させた。

後ろから怒鳴り声が聞こえてくるが、その声は次第に小さくなり、やがて聞こえなくなるのだった。

・・・

「チッ……何なんだ、あの野郎……場をかき乱すだけかき乱しておいて情報だけ掻っ攫う気か？」

しかし、俺の部下を舐めてもらっちゃ困る。

ちよっと脅された程度で情報を吐きだす軟弱者が、漢王朝に齒向かう黄巾党に入るわけがない。

とはいえ各地で黄巾党を名乗る山賊が悪事を働いているという噂は事実だ。

まあ、いずれそんな奴らも駆逐するつもりである。

「それに、「ただの賊だ」と勘違いしてくれるのならそれに越した事は無い」

さっきの奴……アル＝プライドとか言ったか？聞き覚えのない名前だ。

だが、かなりの使い手であると言う事は先程の立ち合いで分かっている。

そんな奴すら俺達の事をただの盗賊の集団にしか思っていないのだ。

「……だからこそ、そうやって侮っている奴らの喉笛に食らいつく事も容易なんだけどな」

噂によると、陳留から軍がやってくるらしい。

陳留の勅使はかの曹孟徳。奴らをつぶす事が出来れば俺達の力を天下に示す事が出来る。

後は『天の御使い』とか言う奴が率いている義勇軍だ。本来あれを釣る為にこの義勇軍をじわじわと攻めていたのだが、思わぬ大物がかった気分だ。

「お前ら、出て来い。先程連れていかれたのは誰だ？」

俺の言葉で周辺に隠れていた10人……本来は11人なのだが、そいつらが俺の下に集まる。

そして集まった同胞の顔を確認し、その中に足りない人物を導き出す。

「……範の奴が連れていかれたか……」

義勇軍相手ならば、緩い事しかされないだろうが……あの男はどうだろうか？

そして何より、あの気を扱う技術は厄介だ。まさか俺の毒に耐えるだけではなく、あまつさえ俺の部下を攫ってこの場を離脱するとは思わなかった。

「範の奴は死んだと思って行動しろ。

もうじき俺達の敵が現れるからな、それまで英気を養えと、別の埒に移動した奴らにも伝えろ」

その言葉を受け、10人は様々な方向へと一斉に駆けだす。

俺達の隠れ家は広く点在している為に、こうして伝令まがいの事をしなければ全員に情報を行き渡す事が出来ない。

……範の奴も捕まった場合、どういう扱いを受けるかは心得ている。

あの男なら、確実に情報を絞り取るに違いない。出来る事なら、範の奴には自死を選択してもらいたいところだ。

人間としての最期を迎える機会は、奴に連れ去られている間しかないだろう。

「範よ、俺が地獄に落ちたら地獄の案内を頼むぞ」

後で墓を作ってやらねばな。

その中に誰も入れる事など無いだろうが。

・・・

「……で、相手の事を侮ったあげく、捕まえた奴も道中に自殺されたわけか」

「かえすことばもございませぬ……」

拙者、最高にかっこわるいでござる。

だが、言い訳させてもらおうと情報を渡す前に潔く死んだこいつ…

…本当に黄巾賊か？（疑惑）

そこらの兵士なんかよりよっぽど優秀だ……。

「馬元義……」

次に出たら絶対仕留める。

a c t 7. 失敗は成功のなんたら（後書き）

どうしてこうなった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311y/>

なんでも屋さんが三国めぐり

2011年11月9日18時15分発行